

大学の危機時代における現代的課題

——社会人学生に対するケーススタディ分析を通じて——

小向 敦子

Can We Change the Crises for Universities into Opportunities? :
—A Proposal Based on Dialogues with Mature Students—

Atsuko Komukai*

Abstract

The Ministry of Education, Science and Technology has predicted that the number of candidates who hope to enter universities and the actual enrolling capacities of universities will be balanced by 2009. A precedent already exists in the fact that one-fourth of private universities are now facing difficulties attracting sufficient numbers of students.

With the hope of overcoming such crises for universities, this paper examines the past and current conditions of universities through dialogues with mature students at JIU. The author also discusses the possibilities and limitations facing universities in the future.

Table of Contents

1. Introduction
2. Method
3. Result and Discussion
 - (1) Turning point in the past (2) Reflections on the present (3) Prospects for the future
4. Conclusion
 - (1) Problems facing universities (2) Who do universities teach? (3) What do universities teach? (4) How do universities teach? (5) The relationship between universities and society (6) The way universities can evolve in the future
5. Acknowledgements

(*城西国際大学語学教育センター・研究員)

目 次

1. はじめに
2. 研究の方法
3. ケーススタディの結果と考察
 - (1) 過去からの転換 (2) 今を見つめて (3) 明日への展望
4. 結びにかえて
 - (1) 直面している問題 (2) 誰のための大学か (3) 何を教育する大学か
 - (4) いかにか教育する大学か (5) 大学と社会の関わり方 (6) 大学の未来像
5. 付記

1. はじめに

大学と呼ばれる学び舎の起源は、古代アテネの哲学者であるプラトン（初代学頭）がアセン郊外の庭に開いた学園、アカデミア（akadé-meia）に遡ることができる¹。大学は新進気鋭の弟子が哲学者の下で議論を戦わせる形式から、次第に一握りのエリート的市民層を養成する場へと変貌を遂げていった。

20世紀前半ともなると大学は、西欧・米国、そして日本で、エリート（大衆）教育からマス教育の場へと推移し、孤高な象牙の塔から、誰にとっても手の届く場へと新たな存在地位を獲得した。そのことに留まらず大学は、1960、70年代になると西欧・米国でエガリタリアン（全人にとって可能な）教育の場へと更なる進化を遂げた²。日本でも21世紀を迎えた今日、ついにその転換期を突破しようとしている。

しかし日本では、このような大学の進化に伴う変身振りが、否定的に取り扱われている。大学がエガリタリアン教育となれる、その記念すべき転機の時が、「大学の歴史始まって以来の危機」「前例のない厳冬の時代」と懸念されているのである。

海外での様子を見てみると、例えばアメリカの大学は60年代に大学全入の状態に達したが、マイノリティ（アフリカ系アメリカ人や移民など少数派）や社会人を受け入れる体制を打ち立てたことで倒産の危機を乗り越えたばかりか、今も尚世界から優秀な研究者・留学生を惹きつけグローバルな大学としての地位を堅持している³。日本でも、この大学全入の事態を肯定的に受け止め、大学にとっての更なる前進の一端とする術はないのだろうか。

もし仮に日本で、どうしても大学の危機が問われ続け、バッシングの嵐が止まないとしても、それらの大学に対する批判の中に大学にとってのチャンスが潜んでいるはずである。「機会は危機の隣り合わせにある」と広く言われる通り、現在大学が直面している大きなピンチには、それなりの大きな可能性も含まれている。昔から「背水の陣」や「火事場の馬鹿力」と表現される、不退転の覚悟を決めた状況は、その人にとっての弱さではなく、強さとなってきた。絶体絶命の危機に直面して初めて、平常時のテンションではできない決断・発想が生まれ、それらが成功や飛躍をもたらす力を生み出す事があるからである⁴。

目下のところ大学問題はかつてないほど、マスコミにとって格好の題材となっている。このことで却って、大学は望んでも得られなかったほど、多大な注目を社会からすでに注がれていることになる。そうであるならば今こそが、大学が従来温め続けてきた力を発揮して、社会の人々の期待に応えてみせる、その時なのではないか。

思い起こせば大学がレジャーランドと揶揄されたり、18歳人口の減少が問題として視界に入り始めた90年代初頭、大学にとっての救世主として新に設けられたのが社会人入学の制度であった。本稿では本大学に在籍する（元・現役）社会人の学生からの意見に耳を澄ませ、大学のあり方を再検討し、更に大学の今後のあるべき形態を探っていく。大学がたとえ数々のハードルに瀕してもそれらを乗り越えて将来へ突き進めるべく、前向きな展望を導き出すことを狙いとする⁵。

2. 研究の方法

本研究は社会人入学制度により現在、本大学に就学している4名の学生から大学に関する所見を述べてもらい（ケーススタディ）、その結果を基に大学への省察及び問題提起を試みたものである。尚、本稿ではこれ以降、彼らのように社会人入試の枠で入学した学生を社会人学生と表記する。一方、18-22歳人口を中心とする従来 of 典型的大学生を一般型学生と称することにする。

本研究への協力を乞うにあたり、社会人学生の方々には学部名・性別・年齢は開示されるが、名前は匿名とすることを予め伝えている。また本稿は最終的に「大学紀要」へ掲載されるものであり、一般の学生の目に触れる類の掲載はなされないこと。更に本稿は印刷へ回す前に彼らに閲読して頂き、その時点で公開したくない情報を削除する事ができる（つまり彼らの同意を得ない限り、彼らの言葉が活字になることはない）旨を、

説明し承諾を得ている。

4名の学生について本稿中ではそれぞれ、A崎、B森、C田、D本と表記する。彼らのプロフィールは表1に記す通りである。B森氏、D本氏はかつて、授業を担当し一学期を共に過ごしたことがある学生である。A崎氏、C田氏とは、以前からの面識はない。両者は社会人学生の中でも学習奨励賞を受けたことがある学業優秀な学生であり、この度の研究へ協力を依頼した。

4氏には筆者から質問票を書簡の形式で3回送り、その都度回答を返信して頂いた。質問票のテーマはそれぞれ、過去からの転換（第1回）、今を見つめて（第2回）、明日への展望（第3回）とした。第1回目の書簡では主に（1）なぜ以前、大学ではない進路を選択したのか、（2）なぜ今、大学進学を決意したのか、（3）なぜ数多くある大学の中からJIUを選択したのか、について問いかけた。彼らが大学入学を志すにいたる経緯（その原因・理由）を、自分で自分を振り返る中から解説してもらうことを求めた。

現在をテーマとした第2回目の書簡では主に（1）相談できる友人、または遊び仲間は誰か、（2）一般型学生と自分の違いは有利か不利か、（3）大学への要望はあるか、について尋ねた。現在大学に籍を置く学生として、今ある大学の実態に対して忌憚のない率直な評価を述べてもらえることに期待した。

将来をテーマとした第3回目の書簡では主に（1）大学進学によって得られた（これから得られるであろう）可能性、そして得られなかった（得られないであろう）限界とは何か、（2）大学の出口として社会に対して何を望むか、（3）人生における次なる目標は何か、について回答して頂いた。卒業後に受け入れられて行くことになる社会へ、建設的で具体的な提案を伺いたく思ったからである。

各人の記す文体はその人の気質が表出される手段のひとつであると考えられる為、回答は4氏（本人）の文体のまま記載する。但し紙面に限りがあるため、また4氏の回答の均等性を図るために、回答が長かった場合に、主旨に差し障りの無い範囲で筆者が短縮し、その後に本人からの了解を得ている。

4人から収集した情報はあくまで個人的な視点から述べられた主観である。従ってこれらの結果を押しなべて社会人学生の総論とする事はできない。しかし4氏の言葉があられもない現実の声（訴え）であることに疑いはない。彼らの言葉には、匿名であるからこそ、そしてお互いに顔を合わせない書面に向かっての告白であるからこそその実直さがあり、また人生の経験を積み重ねてきた大人だからこそその鋭く深い洞察がある。これらの貴重な意見や示唆を、大学の展望を語る起点とし、思索を重ねるよすがとすることはできるだろう。

3. ケーススタディの結果と考察

ここでは3回に渡って筆者が送付した質問票のために、4氏がしたためて下さった回答を提示する。形式としては、まず質問ごとに4氏の回答を記載する。次に、それらの回答に対する筆者の考察を付け加えることにする。

表1：4氏のプロフィール

	A 崎	B 森	C 田	D 本
所属学部	経営情報学部 環境福祉学科	経営情報学部 環境福祉学科	人事学部 福祉文化学科	経営情報学部サービス 経営システム学科
入学年度	2000年(9月)	2001年(9月)	2002年(4月)	2001年(4月)
性別と年齢	女・46歳	男・41歳	女・31歳	男・28歳
家族構成	配偶者(50歳)、長男(20歳)、長女(14歳)	配偶者(36歳)、長女(2歳8ヶ月)、次女(5ヶ月)	息子(12歳)、義父(69歳)、義母(67歳)	東金市にて一人暮らし
職歴	一般事務、パート各種、嘱託社員(販売員)、自宅営業(訪問販売、足裏反射療法・リラクゼーション)。	大手自動車会社のレース関係・メカニック部門。現在、自社(自動車整備に関わる会社)代表取締役社長。	高等学校卒業後すぐに結婚。以来11年間主婦。家事の傍らに家業(コンクリート製造販売業務)の事務を担当。	17-20歳まで地元のカラオケ店でアルバイト。20歳で東京へ行き、居酒屋・レストラン・カラオケなどを手がけている会社でアルバイト。21歳で、カラオケ店の店長に昇格。24歳で地元へ戻り、会社(製造業)へ就職し、営業を担当。
性格の長所	順応性がある、努力家、自分の生き様に拘りがある。	好きなことに真面目に取り組むこと。嫌いな物・人に対してもある程度、顔に出さないで分け隔たりなく付き合うことができる。	とにかく明るい。	明朗。多趣味。プラス思考。どんな環境でも適応できる。人とのコミュニケーションを取ることが上手い。
性格の短所	人に対し不器用、拘りが強すぎる。	切羽詰まるまで行動に移さないこと。	頑固(一度言い出したら周りの意見を聞かないタイプ)。マイナス思考。	短期。単純。すぐに感情移入する。落ちつきがない。違うと思う事を曲げるのが嫌い。勝負事に熱くなる。
趣味	フラワーアレンジメント、料理。	専ら時間が空いた時は家の中でゴロゴロしていることが多い。とにかく平日の社会のノイズから自分をシャットダウンすること。	料理。	スポーツ(スキー・スノーボード・サーフィン・野球・卓球・ゴルフ・ビリヤード・ボーリング・マラソン・サッカー等体を動かす事なら何でも)。就寝2-3時間前からお酒を飲みながらテレビや映画を見たり、布団に入って読書をして一人の時間を楽しむ。
得意な教科	生物、医療系の科目。	ある課題に対して自分が調べたり調査した結果を論述的に述べられる教科。	国語。	社会(特に歴史や地理)。
不得意な教科	英語、数学。	暗記しなければならない教科。	数学。	理科(生物・科学・物理は考えるのも嫌)。

(1) 過去からの転換：1回目の質問票に対する回答と考察

質問1. 貴方には高校を卒業*してから、大学へ入学するまでに何年かのブランクがあります。なぜ貴方は以前、大学進学ではないそれ以外の道へ進むことを選択したのか、その理由を書いてください。(*高校を卒業していない方は、その由についても述べてください。)

A 崎氏：高校入学試験が兵庫県方式（今でいう推薦による入試方式）だったため受験勉強を一切しないまま進学校へ入学するが、すぐ勉強について行けなくなり、その挫折感から不登校になる。友人と担任のお蔭で再登校できるようになったが、成績は最悪のまま何とか卒業へと漕ぎ着けた。大学進学は諦め、数少ない就職組のひとつりとなった。就職は新卒の求人募集で一番初任給の良いところへ入った。1年働いただけで結婚退職した。

B 森氏：私が高校を卒業後、大学を選択しなかった大きな理由は、現在私が従事している（当時父が経営していた）自動車整備に関わる会社の存在にありました。この会社を引き継ぐことが、周囲の人たちにとっても、また私自身の中でも暗黙の了解となっていた観がありました。実は、私には高校卒業後の進路の選択肢として就職・大学進学・専門学校進学という3つの道がありました。そんな中で私は会社の要である技術的分野に従業員の知識や経験だけに頼るのではなく、自分自身で習得する事に意味があると思いました。それで大学には進まずに、技術や理論を専門的に学ぶ事ができる専門学校への進学を選択したのです。それは当時の私にとって自分の意志に反することではなく、私の置かれていた環境も大きく影響したのでしょうか、むしろ好んでその道を選択と言えます。一方で、その年代の人の多くが思うことでもあるでしょうが、「早く社会に出て、自分で稼いだお金で自活したい」という気持ちも大きく手伝っていたと思います。

C 田氏：高校時代から交際していた、今は亡き夫と卒業後の平成2年に結婚。同年12月8日に長男出産（2月の予定でしたが早産となりました）。同年12月31日、仕事中の事故で夫他界。自分で言うのも何ですが、激動の人生を歩んできました。当時、夫は31歳、私は19歳でした。結婚（専業主婦の道）を決意するに当たっては、随分悩み考えました。私には幼少の頃から保母になりたいという夢があり、高校卒業後は短大あるいは専門学校へ進学するつもりでいました。しかし夫が1日も早い結婚を望んでおりましたことから、結局私は自分の夢を諦めて平凡な主婦にな

る道を選びました。

D 本氏：私は高校を中退している。辞めた理由としては何点かある。まず第一点目の理由としては、学歴社会に対する反抗であった。私の親族は私以外全員高学歴であり、世間一般で言うエリートである。親族同士は大変仲がよく、年に数回は集まる。私自身も親族一同大好きで。しかし私が中学生になった頃には、従兄弟との話は「成績がどう？」とか「何処の学校へ？」などの会話が多く、一番良い学校（県内）へ入ることへの目に見えない重圧を感じていた。（現に私以外は全員そうである。）中学2年の夏「こんな歯車の一つには絶対なりたくない」と考えていた私は、反抗期も重なり、66か67ぐらいあった偏差値が1年後には38まで下がった。そして高校生になったが、このような重圧との葛藤の中で、どこか切れてしまったのだと思う。これが1点目の理由。

2点目としては高校の校則や校風が理由となっていると思う。中学の校風は「自由」。当時流行っていた短らん⁶・ぼんたん⁷は当たり前で、パーマもかけていた。先生からのコメントは「良いねー、似合ってるよ」で、仲がよかった。注意されたのは人として良くない事をした時ぐらいであった。このような感覚に慣れていた私は、高校（私立）に入り愕然とした。まず校門での頭髪検査では、前髪が眉毛にかかっただけで注意！ 抜き打ち検査は当たり前！ 終いには、私は弁当箱の中身まで煙草が入っているか調べられる始末（当然、煙草は別の場所に隠しておいたけど）。体罰も日常茶飯事で救急車で運ばれた生徒も何人かいた。私と同じ中学出身の生徒は半分くらい退学していった。私は、ただ辞めるのは悔しいと思い教師2人を辞めさせて、そして自分も辞めた。このような高校にいる意味がわからなかったことが、2点目の理由である。

3点目は、高校2年の夏にオーストラリアへ行きホームステイをしたことである。その時私は海外の家には塀がないことに一種の衝撃を感じた。つまり家と家と間に境界がなく、（わかってはいたが）鎖国意識の強い日本人とは正反対になんともオープンなのである。当時学校でも私生活でも束縛されていた私の心に、その「自由さ」がとても新鮮に感じられた。日本へ帰ってからはもう束縛される事に嫌気がさして高校を中退した。

今になって、「自分は何かの名目や制度、他人のせいにして、逃げ道を作って逃げ出したのでは？」と甘えていた自分が見えてくる。社会人になることを選んだのは、ただ茫然と毎日遊びたかったから。それにはお金が必要で、アルバ

イトをしていただけである。当時、寝る時以外は家へ帰っていなかった。

質問1への考察

不登校からなんとか再生し「卒業へ漕ぎ付け」、そして就職したA崎。「父の会社を引き継ぐことが暗黙の了解となっていた」環境の中で、専門学校へ進学したB森。保母になりたいという夢がありながら、彼の説得に押されて結婚を選んだC田。エリート一族からの重圧とナンセンスな高校の締め付けに反旗を翻して高校を中退したD本。

「大学ぐらい行っておかなくちゃ」という弱さに背中を押されて、大学に行った人の中には、「大学へ行っていない人は、筆舌し難い苦労や抜き差しなら無かった事情があって行けなかったのだ」と思い込んだり、「大学に行っていないことをコンプレックスやボトルネックに感じている」という偏見を持つ人がいるのではないだろうか。しかし「大学なんかいかなくたって」という強さから大学以外の道を果敢に歩んでいる人がいる。4氏の回答が、大学進学は数ある選択肢の中の一つに過ぎないことを改めて気づかせてくれた思いがする。

実際、4氏の述懐からは多くの示唆を与えられた。特に「一番初任給の良いところへ就職した(A崎)」「早く自分の稼いだお金で自活したい(B森)」「毎日遊びたかった。そのためにはお金が必要で、、、(D本)」と述べられているように、その年齢の若者にとって、大人だけが自在に操ることができるかに感じられる金の存在感が大きく、彼らの気持ちを就職へと逸らせていたことが伺われる。

またA崎の発言に「進学校へ入学するが、すぐに勉強に着いていけなくなり挫折感から登校拒否になった」、D本の発言に中学の頃「66か67あった偏差値が、1年後には38まで下がった」とある。成績は上がる時にはそれなりの時間がかかるが、下がる時は呆気ないほど速いことが記されている。同じ生徒の成績が良くも悪くも、どちらにもなれるのだから成績という基準で生徒の良し悪し(区別)が付けられないことが解る。

更にD本は「救急車で運ばれた生徒も何人かいた」と述べている。執拗な束縛としか思えない校則と、それを闇雲に蹂躪しようとする教師による制裁など、高校での異常な事態の一例が浮き彫りにされているようで聞き捨てにできない気がする。

質問2-1. 貴方は従来の生活のパターンを多少なりとも変更してまで、JIUへ入学することを選択しました。4年間という長さや仕事に及ぼす影響、また経済的側面から考えても容易にできる決断ではなかったと思います。貴方の大学入学への決意

はどうのようにして固ったのでしょうか。それは貴方の中で年月と共に徐々に確実に
になったのかもしれませんが、きっかけになった出会いや、引き金になった事件
があるのかもしれませんが。貴方にとって大学入学への原因・理由となっていると
思われる経緯（比較的長期におよぶ変化）があれば述べて下さい。特に無ければ
回答の必要はありません。

A崎氏：今の仕事において指導をしてくれた若い上司（鍼灸・マッサージ師）から「社会
性がない」と軽視され、馬鹿にされた気がしていた。同じ資格になれば、それが
なくなるのにと思いながら、とにかく技術を習う間の辛抱だと自分なりに頑張っ
ていた。専門学校へ行くつもりだったが授業料が高く手におえず諦めようともし
たが、気持ちが収まらなかった。これからは「時間給で自分を切り売りしていっ
てはいけない」そして「経済的自立と自活を目指そう」との気持ちが自分の中で
高まっていた。

次第に国家資格を取得することを考えるようになった。介護福祉士の場合で
は3年の実務経験が必要である。早速その経験を積むために3社に応募するが、
何れの選にも漏れた。やる気だけで道は開けない。しかも介護福祉士もマッサ
ージ師も体力が勝負の仕事。私の年齢から目指すのは厳しいであろうことにも
思い至った。社会福祉士なら公務員業務のようでもあり良いかなと判断し、そ
の資格を獲得することを目指して大学入学を決めた。

B森氏：質問1に対する回答でも述べましたように、私は高校卒業後、専門分野の技術と
理論の習得を目指し専門学校へ進学しました。そして当校卒業後、自宅・自社を
離れ大手企業（自動車関係）に就職しました。俗に言う「よその釜の飯を食って
来い」という状況です。2年就業の後、自社に戻りましたが、大手企業と自社と
の業務・経営内容などのギャップが大きく、その頃はまだ若くもありましたので、
理想と現実の狭間で生きることには耐えかね、結局再び家を出ることになりました。
その後、5年間家を留守にしましたが、その間もやはり自動車の仕事に携わって
いました。鈴鹿サーキットでドライバーとしてレースにも参加しました。そして
そのレースを機に、他社遠征にピリオドを打つ意を固め自社へ戻りました。実は
この間何度か大学進学を考えたことがありましたが、日々に追われ、実現には至
りませんでした。

その後大学への進学を考えたことが2度あります。1度目は青年会議所へ入

会した時です。青年会議所は20歳から40歳までの多くは何れ経営に携わるであろう人たちが集まる社団法人格の経済団体です。活動は全てボランティアで、その活動分野は福祉・青少年育成・環境・経済問題・精神修養・自己修練など多岐にわたり、時にそれは国境をも越えます。ここでは組織的リーダーは存在するものの基本的には全てが1年でリセットされ会社の大小に関わらず会員全ての立場はフラットであるという環境が保たれています。この活動に割かれる時間と経費は想像を遥かに越えるものでした。しかしそこから得る喜び・感動や仲間との関係は、更に素晴らしいものであったと感じています。今思えばその青年会議所に入会した当時、私の大学に対する興味は好奇心の方が強く、まだ現実的ではなかったようです。大学を卒業している人が多いのだなど知り、大学で経済学や経営学を学んだらどんなだろうと、考え始めていました。

2度目は38歳の時です。青年会議所での様々な活動の中で、海外経験が増えつつありました。そんな折、国境を越えた青年会議所同士のフレンドリーシップはあるものの、実際には国家間の関係が微妙にかみ合っていないところも幾つか存在していることが気になりました。新聞などの情報と、これまでの私自身の経験だけでは答えが出せそうにありませんでした。そこで基礎的知識を身につけ、理論の構築を図るために大学へ進むことは意味があると強く思うようになりました。

C田氏：夫を亡くして以来私は「我が子・命」で息子（子育て）を生きがいとしてきました。しかしこの数年、息子の急激な成長を目の当たりにし、子が親の手を離れていく事を実感する場面に多々遭遇しました。「子離れ・親離れ」の時期に来ていることを痛感させられる日々を送っていました。

私は幸せなことに、経済的には恵まれています。労災年金、国民年金の遺族基礎年金を受給させて頂いており、また家業の手伝い（事務）をしながら安定した生活を遅らせて頂いています（夫に感謝です！）。学費については夫が亡くなった際におりた生命保険の一部を使っています。しかし大学に入学する2、3年位前からでしょうか、私は「これからの自分の歩む道は何処にあるのか」、「何を目的にどう生きてゆくのか」を模索しておりました。

そのようなある時（2年前のことですが）友人から地域ボランティア（給食サービス）への参加の誘いがありました。以前からボランティアに興味を抱いていた私は一つ返事ですぐOKいたしました。ボランティアの活動内容は月1回、

30代から60代くらいの主婦が15名程度集まり、献立・買出し・調理・配達までを行うサービスです。雰囲気の良い集まりで、私は月に一度の活動を次第に心待ちにするようになりました。この地域ボランティアがきっかけとなり、高齢者や障害者あるいは児童といった、いわゆる福祉サービスを必要とする人々の存在が急に身近に感じられ、福祉の世界に惹きつけられていきました。そしてまず自分が福祉と向き合ってみると、それとは私にとって欠かせない存在であったことに気づきました。この福祉の恩恵を受けて私達親子は今日生活させて頂いているのだと考えるようになり、多くの人々の優しさ、社会に対する感謝の気持ちが徐々に募りました。「どん底の悲しみを味わった私にしかできないことがきっとあるはずだ」「今度は私が社会へ恩返しする番だ」と考えるようになりました。そして「私に出来る事は何か」「福祉を知りたい、勉強したい」という欲がどんどん沸きだし、社会福祉士（福祉のプロ）になる決意で大学へ入学しました。

D本氏：そもそも大学へ入学することになった発端は23歳の時、何気ない私の父への質問であった。それは「経営学って何学ぶの？」である。父から返ってきた言葉は「行けばわかる。」その時私は将来に起業することを考えていた（今でもそうである）。私の経験を活かすためにも、飲食店やアミューズメント業などの業種で多角的経営・開業を考えていた。

私は飲食店での経験から「待つ営業」を学んだ。これは飲食店とは、お客様が来店してから始まる営業（活動）だからである。もちろん割引チケットのピラを配るなどの営業もあるが、基本的にはお客様が店に来てからスタートするので「待つ営業」なのである。この仕事を通じて私は「また来店して頂きたい」「当店のサービスや雰囲気に満足して頂きたい」と思う気持ちから自然と体が動き、人と人との触れ合い（サービス）という、形の無い、目に見えない場面での臨機応変な対応を覚えた。

次に会社で営業を担当し「攻める営業」、即ちこちらからお客様（相手会社）へ飛び込んでいく営業を学んだ。私はこの、環境に関する産業をメインとする会社で、簡単に言うと産業廃棄物の営業を行っていた。強引に押すだけでなく、お客様の要望を聞き、それについてアドバイスすることで柔軟・迅速な判断力を身につけた。このような経験を経てふと考えたのが「待つ営業」と「攻める営業」を学問として学んでみたらどうなるのか？これが父への質問、「経営学

とは何を学ぶのか？」へ繋がったのだと思う。

大学へ入学する前は、受験することを家族以外の誰にも言う事ができなかった。誤解を避けるために言っておくが、私は友人が多い方である。私は悩んだ、悩んだ、悩んだ、かなり悩んだ。金銭面では父が「そんなこと気にするな」と言ってくれ感謝した。しかし自分もある程度の年齢だ。夜の仕事の正社員になれるだろうか？ この歳で親の脛をかじってよいものなのか？ そこまでして学びたいのか？ 10近くも歳の離れている人たちと上手くコミュニケーションできるのか？ いつも一人でいることになってしまうのでは？ この歳では結婚についても少し考えた。別に結婚がしたい訳ではないが、卒業する頃は三十路である。それ以降の結婚となると遅くなるし、在学中に友人達がどんどん結婚していくと焦る！ 結局「前へ踏み出さなければ何事も始まらない。やればできる。」と思い、入学を決意した。

質問2-1への考察

A崎の回答には、若い上司から軽視されたことや、就職しようとしたが選に漏れた現実の厳しさに突き動かされて、「時給で自分を切り売りしない」、そのための資格を取得したいと考えるようになった経緯が記されている。改善しなければならない状況を経過することで、大学という新たな境地が臨めるようになったのだろう。一方、青年会議所の活動を通して大学への感心と期待が芽生え、そして次第に膨らんでいったB森。彼は「経験だけでは答えがでない」知識と理論の構築を求めて大学入学を決断している。

C田は息子の成長を目の当たりにすることで自分のライフステージが変わったことを悟ったようである。自分が「何を目的にどう生きていくのか？」、息子の歩む道ではなく自分の歩む道を見出そうと大学入学への気持ちを固めている。この決心の源は、かつて「保母になる」夢を結婚のために断念したものの、まだ消えてはいなかった彼女の中の埋火に辿ることができるかも知れない。

D本は就業経験を通じて「臨機応変な対応」を覚え「柔軟・迅速な判断力」を身につけるようになった。やがて「経営学とは何を学ぶのか？」との疑問を抱き、起業への野望も手伝って、大学進学に関心を寄せるようになる。

4氏にとって、現役から離れて久しい学生生活へ戻る決心は中途半端の志でできる容易な選択ではなかったはずだ。「悩んだ、悩んだ、悩んだ (D本)」結果、ややもすると逡巡してしまいがちな復学への一步を踏み出した彼らは、漫然と学ぶために大学を選んだ

のではない。実践的な知を持つ彼らは実践の中で抱いた疑問を、理論的な知で埋め合わせようとする動機に満ちている。だからこそ大学は、彼らの期待に答えて余りある学びを提供できる場となっていかなければならない。

質問2-2. 貴方が大学入学を志すようになったその経緯の中でもとりわけ、「ある言葉を聞いた」、「ある現場を目撃した」など、貴方が覚醒した、殻を破った数秒間・一瞬（比較的短期における出来事）はありますか。もし特定できる貴方にとってのターニング・ポイント（決定的転換点）があれば記述してください。特に無ければ回答の必要はありません。

A 崎氏：大学入学に際してだけではなく、人生の岐路に立つ時に、いつも思い起こす言葉がある。販売員時代の顧客の一人に、はんこ屋さんの社長夫人がいた。「私は、お金も時間も充分にある。何不自由無く見えるだろうが、60歳を超えると運転やゴルフを始めたくても出来なくなるのよ。若い時に何でもやっておきなさい。お金はかかっても自分への投資だからいいのよ、頑張んなさい。」と言われた。私はその後、すぐに運転免許を取りに行った。そして今回の大学入学もやはり彼女の言葉から影響を受けているのだろう、「自分への投資」と考え挑戦することにした。

B 森氏：質問2-1でも述べましたように、青年会議所での活動が私にとって大学を志すに至る大きなターニングポイントになったと思います。一旦社会人になってしまうと、多くの場合、その仕事だけに従事することになり時間的にも精神的にも他のことに打ち込むことはなかなか難しいものです。私は青年会議所で会社経営をしているだけでは、なかなか接触するチャンスがなかったであろう分野の経験を得ることができ、色々なことを学びました。福祉・環境・青少年育成・経済・海外経験などは一見、仕事の業務とは何の関係もないようですが、その様々な経験は自分自身が持っているコップの大きさを変えてくれました。コップから漏れ出る事態への対処方法がたくさんあることにも気づかせてくれました。つまり全てが自己修練であり視野と器を広げることに繋がったという訳です。私にとりましては、大学への志が固まったきっかけとなった何か重大な事件や一言は、特に無いと思っています。青年会議所での活動が、徐々にその気持ちを高め、その活動が一段落したところで、一種自分にとっての憧れでもあった大学への進学が決意

できたと思っています。

確かに仕事と両立しながら大学に4年間通うことは生活パターンの大きな変化であり、きちんと通えるだろうかと、不安もありました。問題は経済的な負担よりも時間の調整にありました。けれど幸な事に私は仕事で采配を振える立場におりましたし、どうしても（物理的に）時間が不足するところへはプライベートの時間を代替することで解決できると考えました。このように私が、自分の問題を解決できると自信を持てたことには理由があります。それはやはり青年会議所での10年に及ぶ活動が根拠となっています。この経験があったからこそ、大学進学に際しての難題もクリアできると確信できたのだと思います。

C田氏：私には大学入学を決意した忘れられない出来事があります。それは地域ボランティア活動（給食サービス）でのことでした。当時、私の配達担当であった、ある利用者が弁当を届けた際にこのようなことを言ったのです。「月に一度の弁当が一番楽しみ。美味しいお弁当が食べられるのは勿論のことだが、あんた達に会えること、こうして話ができることが何よりも嬉しい。」と弁当を差し出した私の手をぎゅっと握り締め、涙ながらに語ってくださったのです。私はこの時「私がすべきことはこれだ」と確信しました。他の誰かのために何かができることの素晴らしさを教えられた一瞬でありました。私自身、周囲の人々の励まし、又は社会的支援を受けながら生きてきた人間のひとりです。それまでの私は、サービスを利用する側の立場、つまり受身の立場で福祉と接していました。「そうだ。これからは私が福祉の援助者になろう。そして今までの辛い経験をマイナスのままに終わらせるのではなく、プラスに転じていこう。」と自分の生きる道が開けたような気がしたのです。

D本氏：私は現在までの28年間を振り返ってみてポイント（敢えてターニングは抜かず）は3つあった気がする。1つ目はオーストラリアのホストファミリーの家へ行き外観を見た瞬間であったと思う。（先にも述べたが）あの開放感。家と家の間に何の敷居もない自由な空間を眼にした数秒間に、それまで16、17年間生きて培ってきた考え方が脆くも根底から崩れ去った気がする。

2つ目は、(前にも書いたが)「経営学とは何を学ぶのか」と興味を持ち始めた23歳の時。それ以前は自分に誇りを持つことが出来ず、何をやっても中途半端だった。夜の仕事を辞めて、地元に戻り、親を安心させたいと考えていたが、地元に戻って誰かに「東京で何をやってきたの?」「何を得たの?」と聞かれても、自分が胸を張

って言える事は「素晴らしい友人達ができる」ことだけだった。

そこで自分のためにもなる大検⁶に挑むことを思いついた。この試験は当時の自分にとって、それなりに難しかった。私は高校へ2年まで行ったので、11科目ある中の7科目を受験しなければならなかった。大検を受ける決心をしたのが3月、テストは8月に行われた。私は受験日までの4ヶ月間、「途中で投げ出さず、できる事だけでもやってみよう」と勉強に励んだ。

テストの合格発表は9月30日。結果は実家へ送られていた。私は実家へ電話をして、通知の封を切らずに待っていた母に「開封して見てくれないか？」と頼んだ。結果は7科目全て合格。母が通知を開封し、合格したことを告げてくれた数秒間、自分のその後の人生の進路を左右した瞬間であり、自分にとっての3つ目のポイントと言えるだろう。

この経験で私は自信を持つようになった。数年も勉強から離れていた私が、数ヶ月の勉強で全ての科目に合格できたのだ。この時に、現在に至るまで私の信念となっている「何事もやれば絶対にできる」が生まれたと思っている。

質問2-2への考察

A崎は大学進学を、現状に甘んじることなく「自分へ投資する」決意で敢えて選択した。平穩無事に歳を取ってしまった女性からの「若いうちにやっておきなさい」との警告から、年齢によるリミットを感じ取ったからこそ踏み切れた決断であった。

B森にとって大学進学を動機づけた、特定できる決定的転換点はない。外部からの要因というよりはむしろ、自問自答を繰り返し自ら(内部から)の声に促された末の判断と言えるであろう。人生の壁に突き当らなくても自分と対峙することがターニングポイントになる。「一種自分にとっての憧れであった大学」進学は、自分への挑戦であったのだろう。

一方、社会の恩恵があったお蔭で今日の自分がある、との思いを常に抱いていたC田。彼女の思いは給食サービスで利用者に喜んでもらえたことをきっかけに、「これからは私から、、」と能動的な自覚へと連なっていく。大学進学は、地域での活動を通じて社会の一員として責任を果たすための(社会に貢献するための)学習でありながら、再出発を決意した彼女自身のためでもある。

D本は帰郷することで「自分は上京して何をやったのか」と、茫然とやり過ごしてきた年月が結果として蓄積されていないことを自省する岐路に立った。時を同じくして「経営学とは何学をぶのか？」との疑問を感じていた事もあり、大検へ向けて一念発起する

瞬発力が沸いたようだ。

4氏は必ずしも充実した悔いのない人生を送ってきたわけではない。他の誰に対しても言えるように、若い時であれば尚更のこと、数々の失望も味わってきたはずである。しかし彼らの述懐には、過去の経験を全て自分の財産として見方に付けて、それを糧に更に前進しようとしている直向さが表出している印象を受ける。彼らは人生の経験を無駄にするのではなく、その経験を生かそうと、大学入学を決意した。現在進行中の生活からハンドルを切り返してまで、試練とも思える大学という境遇へ彼らを飛び込ませたのは「自分にはできる」という自負であり自信であったと思う。

特に勇気付けられるのは「青年会議所での活動を通じて得た自信（B森）」「大検で全科目合格した自信（D本）」の言葉である。今後彼らが困難にぶつかった時「自分にはできる」なぜなら大学でこんな事もあんな事も経験したからだと、勇み直せるように、大学は卒業生にとっての、自信と勇気の拠り所でありたいと願う。

質問3. 数多くある大学の中から、貴方はなぜJIUを選んだのか、その訳を書いて下さい。

A崎氏：国家資格取得が可能、自宅から通学が便利、社会人入試の枠がある、現在の仕事と両立できることなどがJIUを選んだ主な理由である。その中でも最大の理由はやはり大学側が社会人のために、論文と面接による審査入試を行った（筆記試験から免れた）ことや、入学後に設備費の納入を控除するなど、門戸を開く姿勢を示してくれていたことだ。

B森氏：大学の選択に当たって私には幾つかの条件がありました。学びたい学科があること、教授陣が魅力的であること、教育方針が自分の考えと合っていることなどで、中でも最も大きな位置を占めたのは「通える」ということです。いわゆるネームバリューのある都内の大学でも社会人入学の枠を持っている所は幾つもあり、一般入学よりもずっと優しい試験で入学できます。けれど私が求めたものは有名大学の卒業証書ではありません。きちんと通って学ぶ事、大学の雰囲気を充分に感じる事が絶対条件でした。大学選択をしていた当時、JIUの大学院に通っていた知人がJIUの存在を教えてくれ、エールを送ってくれました。JIUは会社からも自宅からも比較的近くにあります。時間的負担が少ない事は仕事との両立に大きく影響します。そして更に、JIUは最初に私が掲げた条件を満たす大学だったことが決め手になりました。

C田氏：1番の理由は自宅から車で約20分の近距離にあり、通学するのに大変都合が良かったという点です。やはり家庭を持つ身であるので通学距離について第一に考えました。第2の理由としては社会人入試の枠が設けられていたことです。これは本当にありがたかったです。そして学校を見学させて頂いた際、素晴らしい環境と最新設備の整ったJIUに深く感動し、入学への決意を固めました。

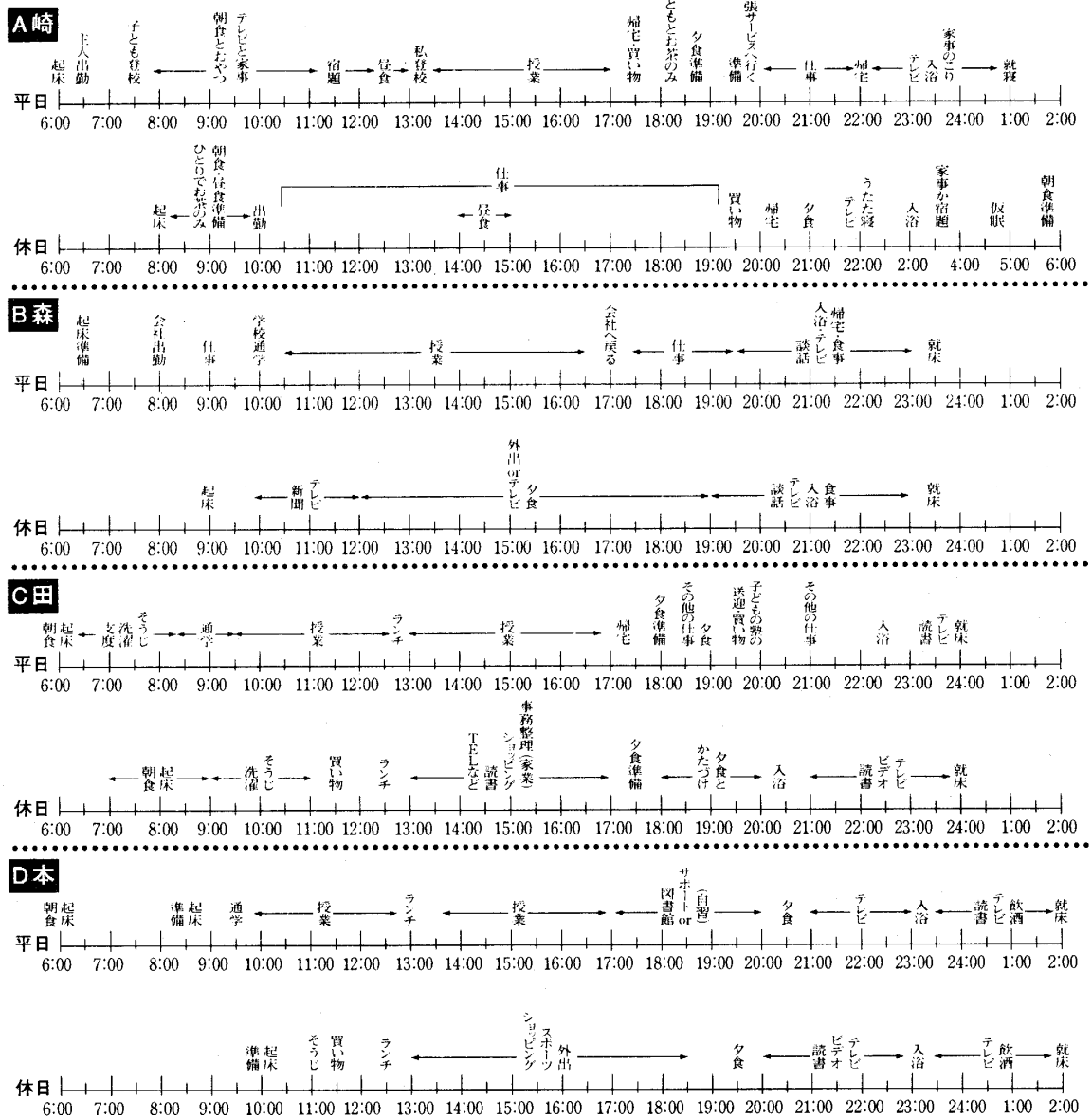
D本氏：サービスについて私が興味を持っていたのを知っていた母が、偶然に新聞でJIUのサービス経営システム学科の広告に気が付き、私に知らせてくれた。JIUを選んだことは偶然による巡り合わせだといえる。実は、私は京都が好きなのもあり、色々と斬新な取り組みや社会人入試を行っている立命館大学に密かに興味をもっていた。しかし受験を決意した前日に当大学の社会人入試は締め切りで、受験が出来なかった。私はJIUの学科に興味を持っていたので、そのことは諦める事ができた（受けて見たかったような気はする）。JIUでは、講師陣に企業からきた人が多く経験に基づいて教えてくれ、非常に満足している。

質問3への考察

4氏の回答から、通い易さ・アクセス度（A崎、B森、C田、D本）、柔軟な入学制度（A崎、C田）、大学の教育方針（B森）、特徴あるプログラム（D本）、魅力ある教授陣（B森、D本）、キャンパスの設備（C田）、スタッフの印象（C田）、新聞広告（D本）、知人の紹介（B森）などがJIUに進学を決める要因となっていることがわかる。

一般型大学生の中には、親や先生など他者の指示に従ったり、彼らの希望や期待に沿うために入学した者がいるだろう。日常からの逃げ道としてや、資格を得るためだけに大学へ来ている者もいるだろう。時間・仕事（家庭での義務）・コストの問題を自分なりに解消し、周囲（職場・家族）の理解と協力を漕ぎ着けてJIUを選択してくれた4氏。「大学の雰囲気を感じて学ぶこと（B森）」に期待を馳せ、通うキャンパスで、教室で、彼らは何を考え、何を願っているのだろうか。JIUは彼らの眼にどのように写っているのだろうか。2回目の書簡で、意見を請うことにする。

図1：1日の時間割



(注) 4氏の平均的な1日の時間割を、平日と週末・休日(ともに学期中)に分けて書いて頂いた

(2) 今を見つめて：2回目の質問票に対する回答と考察

質問4. 貴方は一般型学生と自分の違いをどのような時に、どんな風に感じますか。具体的に例を挙げてみてください。とくに違いを感じなければ、その理由を書いてください。

A崎：自分には自由時間がほとんど無く、予習や、レポートを仕上げて出かけたとしても、家事を優先する事が多い。そんな時、一般の学生が羨ましく思う。半期ごと

の授業料を常に意識して、無駄使いを控えなければならず、それがストレスになる。納入後は貯金がゼロで空しくなり、将来への不安や焦りを感じることもある。また一般の学生に比べて、学んだことを理解するまでと、与えられた課題を仕上げるのに時間がかかり過ぎてしまい、能力の差を感じる。

B 森：授業に出ている時は、特別に違いを感じることはありません。ただ、今は私服で通学していますが、入学当時はスーツで通っていたため、何度も先生と間違われ、それが恥ずかしいと思う事はしばしばありました。

C 田：まずはファッションだと思います。次は、何気ない会話の中に感じるのですが、彼らが使う言葉（日本語）が理解できないことです。例えば「明けましておめでとうございます。今年も宜しく。」を「あけおめ。ことよろ。」と表現することにはびっくりします。

D 本：一般型学生と自分とでは考え方が一番違うと思う。私は色々な経験を経てから、大学生生活を送っている。しかし一般型学生は小・中・高へと多少の障害はあったかも知れないが基本的にはスムーズに過ごし、大学生になっている。それが良いとも悪いとも言わないが、年齢的な差がある分違いが合って当然だし、むしろ無くてはいけないと思う。具体的な例を挙げると、彼らは友人と遊んでいる時に事後先を考えるとというよりは、その刹那のノリで行動したり、恋愛においても上手く気持ちの整理ができないのではないかと、感じることもある。しかし私は「そういう時はどうしろ」などとは言わない。自分で考え悩み苦しむからこそ自分というものが形成されると思うので。あくまでも正しい・間違っているは別として（私にもわからないので）「どうしても」という時に助言としたいと思っている。

質問4への考察

大別すると、ファッションという外見（C田）、言葉という文化（C田）、そして能力・考え方などの中身（A崎、D本）に違いを感じているようだ。ファッションに関しては、知らず知らずの内に「先生はスーツ姿、学生はラフな格好」などと、漠然ではあるもののステレオタイプを抱いていることに気づかされる。また「あけおめ。ことよろ。」に代表される一般型学生（若者）が駆使する言葉は、彼らだけが通じ合う事ができるためのサブカルチャーであり、他の年齢層の学生にとっては疎外感を味わう一因ともなっているようだ。

また人生の先輩としてD本は、一般型大学生の考え方を「事後先を考えられない」

「恋愛においても上手く気持ちの整理ができない」と見ている。その一方でA崎は、彼らの持つ潜在性に一目置いて「能力の差を感じる」とコメントしている。

日本では社会人入学の制度が多くの人に認知されている。しかし実際大学の中でそのことが十分に浸透しているとは言い切れない。イギリスやアメリカの大学で社会人学生（主にパートタイムの学生）がごく自然にキャンパスを闊歩している光景とは、まだ溝を開けられているのが現状ではないだろうか。大学が、世代を超えた学生同士が触発・啓発し合い、交友を繰り広げることのできる舞台になれば良いと思う。

質問5-1. 一般型学生との違いは貴方にとって有利（例：異色を放つことによる得や、目立つことによる特権）なのか、不利（少数派・アウトサイダーとしての孤立感の深まりや、居心地の悪さ）なのか、どちらでもないのか、どちらともあるのか、お答えください。

A崎：有利・不利の両面があると思う。有利な点としては、社会人入学で入りやすかったが、不利な点としては就職を一般学生と同じように取り組むと、先生や就職センターのお荷物になっているようで、気が引ける。実習先にしても、社会人（や留学生）には人気のある施設は紹介してもらえないようだ。先生に意見を述べたところ「自己開拓してくれ」と言われたが、自分としては既にボランティアなどで施設の中の様子をある程度理解できており、もう実習する必要はないと思われる。時間に余裕が無いことと、真剣に取り組んでいることが、なかなか理解・評価されない。

B森：現代では社会人でもあり学生でもあるという現象はあまり珍しくないと思いますので、有利・不利といったことは感じません。最初はきっと不自然さを感じた人も周りにはいたのですが、だんだん気にならなくなって来ているのだと思います。

C田：有利でもあり、不利でもあると思います。有利なこととしては、社会人を一般の学生とは別枠で入試選抜して下さったこと。また入学金が免除されたことは有がたかったです。不利なこととしては、18-22歳の若い子たちの中にと、話題や言葉の意味がよく理解できず、孤独を感じてしまうことがたまにあります。

D本：有利と不利の双方があると思う。有利な点：目的意識を持ち行動に移している。人とのコミュニケーションを上手くとれる。先生方と上手く接することができる。年齢の分だけ相手（先生・友人）が耳を傾ける。不利な点：友人の結婚や出世の話を知ると焦る。大学の友人に教えてもらう事もあるが、教えることの方が多い。4年

間社会に出ないために学問上の向上があっても経験を積む機会がない。自分の成長がストップしてしまう焦り。年齢制限に拠り一定の公務員（教員・消防士）にはなれないなど、就職の選択肢が狭められている。もうやり直しができない。

質問5-1への考察

「先生や就職センターのお荷物になっている（A崎）」「社会人や留学生には人気のある施設は紹介してもらえない（A崎）」「孤独感を感じることもある（C田）」と、彼らが煙たい存在になるまいとして肩を窄めている様子が垣間見られる。折角入学の際には「入学金が免除された（C田）」など、社会人学生に対して別枠・特例を設けたのであるから、入学後も引き続いて彼らへ便宜を図るための考慮がなされることを望む。社会人学生が負い目や引け目を感じる事なく、多数派である一般型学生に迎合する事なく、自分のままだまを曝け出せるために大学はどうあれば良いのだろうか。社会人学生の居場所とニッチを見出す策への再考を促させられた。

また「もうやり直しができない（D本）」と、残された時間が若者よりも少ないことから来る、焦燥感も漏れ出ている。仕事・家庭・大学の三つ巴の生活では、「時間に余裕がない（A崎）」ことは目に見えている。しかし、なかなか自分のための時間を捻出できないことは、楽観的に見れば時間を貴重に感じられるので時間の無駄使いをしなくて済むということになる。しかも彼らが「目的意識を持ち行動に移している（D本）」ために、大学で得る知識が吸収されやすい（定着しやすい）可能性もある。一般型学生は「やり直しが出来ない」「時間がない」ことなど気づかずに過ごしているのではないか。だとすれば現在、彼らを不利にしていると思われる事柄が実は、彼らが違う角度で物事に接していける分、長い眼でみれば彼らを有利にするであろうと思われる。

質問5-2. 一般の学生は貴方の目にどのように映りますか。彼らの長所と短所と思われる点をそれぞれ、(1) 性格、(2) 生活態度、(3) 能力 (4) 学習に対する姿勢、(5) その他、の項目ごとに書き出して見てください。

A崎：(1) 性格は人それぞれだが、殆どの学生は優しい。そしてシャイだと思う。有能（学力優秀）であるのに人間性が伴わない学生も見受けられ、嫌な思いをしたことがある。(2) 朝早くから家を出て1限の授業に出席できているのは偉いと思う。でも折角出られたのだから、寝るのはどうかと思う。お風呂と歯磨きはやってくる

べきだ。当たり前のことだが出来ていない人が結構いるようだ。(3) 本来はもっと能力があると思えるが、怠けたり、諦めてしまっているのもったいないと思う。それぞれに学科を選択して入学してきたのだから、目指してもらいたい。または目標を持って思い切った方向転換を考えても良いと思う。(4) 色々な場面で自分らしくこだわって欲しい。バイトもせず、勉強にも熱心でない学生には失望し、親御さんが気の毒になる。が、我が息子(20歳)も似たようなもので、他人事ではないと反省する。(5) 入学時男子生徒は、子どもっぽく見えていたが、今はそれぞれに逞しく、頼もしく思え、大人になったなと感じる。女子学生には、卒業真近になる頃、眼が優しくなり女性らしい雰囲気が増えることだろう。彼らの成長が嬉しく、かつ羨ましい限りである。

B 森：(1) 長所：伸び伸びとしていて楽観的。人当たりも良く、協調性がある。短所：緊張感に欠ける。(2) 長所：自由奔放である。短所：道徳的な行動に欠ける。(3) 長所：どのような能力についても一定レベルをクリアできる人が多いと思う。短所：何かに特別に好奇心を持って邁進し、その能力を伸ばすという意識が薄いと感ずる。(4) 長所：特に感じません。短所：多くが真面目な学習態度とは言えないと思う。(5) 多くは現代日本の、いわゆる一般的な学生だと思っています。アルバイトに精を出したり、交友関係を深める事だけを大事にしたり、自分の時間はいつまでも永遠にある(笑)という暢気な雰囲気です。大学でがむしゃらになって勉強するというタイプは少ないのだと思います。けれど同じ歳の頃の自分を振り返ると、私もあまり偉そうなことは言えません。自分で学費を払い、時間に追われながら大学生活を送っている今だからこそ、言えることです

C 田：(1) 明るくて素直だと思います。短所としては切れやすい面が見られます。(2) マナーの面(e.g.:言葉使い・喫煙)で、乱れていると思います。(3) 素晴らしい能力を持っているだろうに、勿体無いと感じる学生が結構います。もっと努力(勉強)をして欲しいと思います。また若いだけあって記憶力に優れていることがよくあります。私の場合、同じ事(宿題やレポートなど)を仕上げるのに、彼らの2倍、いや3倍の時間がかかります。(4) がっかりしてしまいます。授業中の私語が酷いですし、眠っている学生も多く見かけます(そうでない学生も大勢いますが)。何のために大学に来ているのか、と問いかけたくなります。

D 本：(1) 真面目な奴もいれば不真面目な奴もいる。(2) メリハリが出来る奴もいれ

ば全く出来ない奴もいる。モラルが低い学生がいる (3) 学習的な能力に限らず運動であったりデザインであったり、人をまとめる能力であったり、それぞれである。(4) なんとも言えない。(5) これらは彼らが個人である以上、一概に「こうである」とは断定できないことだと思う。

質問5-2への考察

一般型学生の性格に関しては「優しい (A崎)」「人当たりがよく、協調性がある (B森)」「明るくて素直 (C田)」と長所を認めている。生活態度に関しては「お風呂と歯磨きをやるべき (A崎)」「道徳的行動に欠ける (B森)」「モラルが低い学生がいる (D本)」など低評が目立つ。

能力に関するコメントとしては「一定レベルをクリアできる人が多い (B森)」「素晴らしい能力をもっている (C田)」とある。「諦めているのもったいない (A崎、C田)」「能力を伸ばす意識が薄い (B森)」と、恵まれた才能を持ちながら引き出せないでいることを残念に感じているようだ。「もっと努力して欲しい (C田)」と、一般型学生の無気力さへ警鐘を鳴らす声も聞かれる。

学習姿勢に対しては「熱心でない (A崎)」「多くが真面目な態度とはいえない (B森)」「がっかりしてしまう (C田)」など、かなり失望しているようだ。子どものために学費を稼ぎ出す「親が気の毒 (A崎)」なことはもちろんだが、「自腹を切って学費を払う (B森)」ようになれば支払に対する収益を求めることから、真剣に授業を受ける気持ちになれるのだろうか。教室が、私語に没頭したり、惰眠を貪るための無法地帯と化さないために、大学は何を教育するのか、いかに教育するのか、改めて問い直す必要があるようだ。

B森は「今だからこそ言える」と、かつての自分と一般型学生の暢気さを重ね合わせている。事前や最中に気が付く事が出来れば、それに越した事はないが、そうできないから、後になって悔やむことが多いのが世人の常である。4氏の回答の中には過去を振り返り、先輩ならではの、温かく厳しい視線が見て取れる。そして「成長が嬉しい (A崎)」と、大人になっていく一般型学生を、我が子へ向けるような親近感を持って見守っている寛大さも感じられる。

またD本の指摘するとおり、長所・短所とは、その人なりのものである。一般型学生の共通点 (タイプ) を見出そうとしたり、あるいは峻別しようとする事には無理があることを認めたい。質問の不適切さは、筆者の未熟の致すところであり反省している。

表2：貴方の友人は誰か

	A崎	B森	C田	D本
遊びたい仲間	主に娘(中2)と過ごす。	子どもが小さいこともあり、休日は殆ど家族と共に過ごすことが多い。40歳までは青年会議所の活動に追われ、家庭をおろそかにしがちだったと思っているからかも知れない。	息子、近所の友人、高校の友人、肉親、JIUの友人などだが、息子と過ごすことが殆ど。	全て共通の友人であり、大きく3つのグループに分けられる。まず1番目は地元の友人。少し長い休みがあると帰郷し、何事も話し、常に連絡を取っている。学期中でも週に3、4回はメールもしくは電話で連絡し合う。2番目は東京の友人。彼らは既婚者が多いので地元の友人程は連絡を取らないが日曜日(月に1、2回)東京で草野球をしているので、そこで会い一緒にプレイする。たまに九十九里でサーフィンをすることもある。3番目はJIUの友人。週に2、3日は誰かと遊んでいる。相談に乗ることの方が多い。
親しい友人	特にはいないが、苦しくなったら信仰の先輩に話す。	あまり悩まない性格なので相談することもないが、たまに仕事上においては他業種の友人に相談する(殆ど立ち話程度)ことがある。	高校の同級生。直接会って話す、電話を使う時もある。基本的にはわが道を行くタイプなので、あまり誰かに悩み事を持ちかけずに自分で解決する事が多い。	
勉強する時の友人	質問などがあればクラスの友人(3、4人ぐらい)に大学で尋ねる。	妻が大学のことに興味を持っているので、語学や教職分野などについて話す。政治・経済のことで議論になる時もある。通常は本屋で参考図書などを買ったり、インターネットで調べて補っている。	JIUのクラスメイト。お互い時間の都合が合えば、大学の図書館で教えてもらう。急な場合はメールで交換する。勉強についてはテスト前に連絡を取る事が多い。	
その他の友人	もとの仕事仲間。必要な時に電話で誘い、会って話をする。	専門学校時代からの先輩や同級生、近隣に住む同業者。会合や組合などで月に一度位は会う機会があり、時間的余裕が出来た時に飲みに行く。でも毎日顔を合わせ些細なことも話をする妻が一番の友人かと思う。	同期で同学部に社会人入学をしたYさんとは、公私ともに親しくしており、お互いに情報交換したり励まし合えるので、頼りにしている。	兄は私にとって友人でもある。草野球で会うし、世間話をしたり、わからない勉強を聞いたり、相談事をする。父母とも同様に話をする。妹にはファッションなど、最新のものを教えてもらっている。

(注) (1)自由な時間を過ごす遊び仲間、(2)悩み事を相談できる親しい友人、(3)一緒に勉強できる・勉強のわからないところを質問できる相手、(4)その他、友人と呼べると思う人は、それぞれどのような人(例：JIUの学生、職場の人、郷里の人、幼なじみ、高校の同級生、近所の人、行きつけの店の人、教員、親、子、兄弟姉妹、配偶者、恋人、特にはいない)か。どれくらいの間隔(例：ほとんど毎日、一週間に1度、必要な時にだけ)で、どのような手段(例：電話で話す、メールを交換する、会う)で交流するか、尋ねた質問に対する回答を基に作成。

質問6. 貴方は決して僅かとは言えない時間・金・エネルギーを、大学生であることに費やしています。貴方がそれらを投資するに見合うだけの代償を大学から得られている、大学が貴方の期待に答えられている、そして何より貴方が大学生活をエンジョイできていることを望んでいます。しかし貴方が「割に合わない」、「期待はずれ」と感じていることもあるでしょう。貴方が大学に対して、気に入っている(満足している)点、と改善して欲しい(不満に感じている)点をそれぞれ、(1)施設、(2)カリキュラム、(3)教員、(4)事務局・スタッフ、(5)その他、の項目ごとに書き出してください。

A 崎：（１）満足：想像以上だったのでほぼ満足している。不満：カフェテラスの料理の味がもう少し美味しければ良いのに。（２）満足：半期ごとの単位なので取りやすい。授業そのものは知らなかったことを知る喜びがあり楽しんでいる。不満：職業訓練校・専門学校的要素も取り入れて欲しい。英会話コース・パソコンコース・（日常に役立つ）法学コース・（社会）心理学コースなど、卒業してすぐ役立つ知識・技術を身に付けたい。不満：授業内容が浅く次の科目への関連がわかりにくく、結局単発になってしまい知識を深められない。必修科目は他学科や、前・後期の両方に置くなど、受講できる機会を増やして取りやすくして欲しい。（教えられる側の問題かも知れないが）英語が解り難い。（３）満足：親しみやすい先生が多く、授業は受けやすい。不満：教える意欲と技術に差がある。以前「４年を通してひとつのコースを選べば技術が取得できるクラブのような形式の学習活動があれば良い」と思い、ある教員に相談したら「ここは大学で、知識を得るところだ」と事も無げに言われた。学生数の減少に対抗する生き残り作戦のひとつになればと思い提案したのだが。（４）満足：トラブルが発生していない時の対応は良い。不満：学部事務での確かな指示・指導がされなかった時には、取り返しのつかない事がある。特に履修について、いい加減な返答だったことが２回あり、惑わされた。（５）９月生であるために、単位取得は半期早く追いつくように急がされたが、社会福祉資格試験・就職は次の学年と同じになり、足掛け５年かかってしまうことが、今ようやく解った。

B 森：（１）図書館やOA施設などが充実しており大変役に立っています。（２）カリキュラムはむらが無く組まれてあり、現在までは理想的に履修が出来ているつもりです。（３）親切丁寧に授業に取り組んでいて、対応も良いと思います。（４）少し不満もありますが、学生一人一人が満足できるように対応していたら切りが無いということも理解しています。ただ一つ言わせていただければ、９月入学者への履修に関する案内や対応が不十分だと思います。４月入学と並行しての事務処理は大変だとは思いますが、もう少し整備されれば良いと思います。

C 田：（１）大満足しています。改善して欲しい点はありません。（２）カリキュラムには問題は感じません。ただ１限の開始を30分早くして頂ければ、５限終了後に帰宅してからの時間にゆとりができて有りがたいのですが。（３）どなたも素晴らしい方々で、またとても親切で感謝しています。（４）感じが良く満足しています。特に事務局の女性職員の方々にはいつも良くして頂いており感謝しています。

D本：(1) 不満：カフェテリアの食べ物が少し高い気がする。(2) 満足：2年次からの授業内容は専門的になってきて非常に面白い。不満：色々な資格を取れるための授業を増やして欲しい。私達が学科の一期生な為か、余り授業の選択肢がない。同じ授業でも(特に英語)講師により成績・評価の基準が違い、不公平。(3) 満足：企業で経験を積んできた講師の授業は経験に基づいているので満足している。不満：講師の教え方が単調なのは聞きづらい。(4) 満足：気さくな人が何人かいる。不満：偉そう!何様?お前は何に優れているの?と聞きたくなるような奴がいる。人を見下す感じ。少なくともそいつ等よりは、人間性も頭の切れも絶対に負けてない。(5) 満足：清掃員が常に綺麗にしている。海が近い。不満：周囲・近所の環境が余り活性化されていない。奨学金が30万は少し少ない。学祭に芸能人を呼んで欲しい。

質問6への考察

施設に対する要望として「料理の味がもう少し美味しければ良いのに(A崎)」「食べ物が少し高い気がする(D本)」が挙げられている。カフェテリアの食事は、大学側から学生への愛情を表現する手段の一つであり、どの大学の学食にとっても、学生が授業と授業の合間に寛げる空間と、高品質で低価格の食事を提供する事がモットーとなっているはずである。しかも昼食時間は毎日あることから、学食とは侮ることのできないヒドン・カリキュラムである。価格・味・栄養面で出来る限りの改善に努めたい。また若い学生の趣向(食欲・味覚)に合わせるばかりではなく、年配の学生が食べても体によい食事であることにも留意したい。

カリキュラムに関しては「職業訓練校・専門学校的要素を取り入れる(A崎)」「資格を取れるための授業を増やす(D本)」など、技術と資格の習得へ拘りを持っているように思われる。また「英語が解り難い(A崎)」「同じ授業でも講師(特に英語)により評価の基準が違う(D本)」との指摘がある。英語は、ネイティブの教員の場合には比較的評価が厳しい、また英語で説明がなされると(英語が苦手な学生にとっては)難しく聞き取れないことがある。それに対して日本人の教員の場合では(ネイティブの先生に比べて)評価が甘い、また日本語で説明するので理解しやすいなど、同じ教科でありながら格差が生じているようだ。

教員に対する要望として「、と事も無げに言われた(A崎)」の意見が目をついた。教授陣の「経験に基づいている授業(D本)」が学生の満足度に繋がっているとの吉報には

救われるが、その反面では机上の空論をぶっている教員がいる可能性も否めない。「学校の常識は社会の非常識」とも言われる中で、学生からの率直な意見を聞き入れてこそ、大学にとっての地平が開けることを改めて念頭に置くべきだろう。尚、事務局に関しては「いい加減な回答だったことがあり惑わされた (A崎)」「9月入学の履修者への対応が不十分 (B森)」「偉そう！何様？ (D本)」と厳しい意見が寄せられている。

(3) 明日への展望：3回目の質問票に対する回答と考察

質問7. (1) 貴方が大学生になることによって新に広がった（広がるだろう）と思われる可能性とは何ですか。(2) 大学生になることでは乗り越えられなかった（乗り越えられないであろう）と思われる限界とは何ですか。

A崎：(1) 自分でもやればできるという自信。(2) 高い社会的評価を得られることが無理なのではと思われる。自己満足で終わってしまいそうな気がしており、だとすれば自分が得られるものは、たかが大学卒業資格なのか、と思うことがある。社会的評価は大学を卒業してから社会的活動を通じて自分がどれだけ社会へ、仕事へ貢献できるかに拠るのだろう。こう考えてみると大学に入学することが目標であったはずが、手段が変わっていたことに気づかされる。人生の山はまだまだ登り坂のようである。

B森：(1) 経験量だけでは得られない知識。(2) 利害以外における人間関係の構築や、人格の形成。

C田：(1) 多くの新しい知識を習得できることにより、夢への選択肢が広くなりました。先生や若い学生などとの出会いから様々な刺激を受け、精神的にも身体的にも活力が漲ってくる感じがしています。読書量も飛躍的に増加したことから、人生の見極め方が滋養されたようです。今後迷い躓くことがあっても、大学で学んだ知識や経験が必ず役に立つと思います。(2) 大学生にはなったものの、家庭を持つ身として、自分の時間を100%学生生活に費やす訳には行かないのが現実です。例えばサークルや部活動へ参加したい意志は大いにありますが、時間が取れません。長期研修への参加も無理と諦めています。やはり私のように子育てしながらの学生生活には、多くの制限が付けられてしまうと思います。

D本：(1) まず視野が広がったことだと思う。そしてそのことによって自分の将来の可能性やチャンスが広がったと思う。(2) 「壊れつつある」と言われながらも、しっ

かりと残っている学歴社会があり、これは乗り越えることが非常に難しい。自分一人で起業をすれば別だが、会社に入れば高卒と大卒、院卒の間の壁、そして大学の銘柄による壁は厚い。能力がある人間でも、学歴のために低いポジションに就くことがある。

質問7への考察

手ごたえとして感じた、手元に残ったこと（もの）と、そうできなかったこと（もの）の両極が浮き彫りにされている。獲得できたものとしては自信（A崎）、や知識（B森、C田）、刺激・活力（C田）、経験（C田）、可能性（D本）、チャンス（D本）などが散見できる。そして出会いがあったこと（C田）、選択肢（C田）が広がった、視野が広がった（D本）ことなども挙げられている。

限界としては「高い社会的評価を得ることが無理（A崎）」と社会に対する懸念や、「学歴社会（D本）」が抱えている弊害についての意見が述べられている。学歴主義から学習歴主義へ時代は巡ったと言われながらも、現実はまだまだ学歴による頭打ち、足切りが平然と行使されているようである。また「人間関係の構築や人格の形成（B森）」までを養育できない大学の限界や、「家庭を持つ身（C田）」であるが故に学生生活を満喫できない自分の境遇に対する限界が吐露されている。

質問8. 大学の出口は社会の入り口に密接に関係しています。貴方が大学卒業生として社会にデビューする時に、是非とも社会に評価して欲しいと思う自負できる点、自己PRしたい点はどんなことでしょうか。幾つか挙げてください。

A崎：（1）人生に行き詰まった時も必ず転換できると思うし、同様の境遇の人と対話することで、彼らに勇気や元気を与えることができる。意識に変化をもたらすきっかけになれる。（2）人生経験によりマニュアル通りにはいかない時の危機管理・危機対応が出来ると思う。

B森：大学で専攻した学問（論文・研究課題）をきちんとやり遂げ、それに伴う知識を持っていること。立場を替えて、もし私が雇用する側であったら、学生の何処を評価するかと考えると、大学での全体の成績よりも、たとえ選択した職種とは関係なくとも、専門的な演習や研究についてどのくらい熱心に取り組んだかを聞いて見たいと考えています。自論ですが、人間の人格形成に関わる大部分は大学生の時

ではなく、小・中学校くらいの時期になされると思っています。ですから成績表は大学の時ではなく、小6と中3年時のものを見せてもらいたいと考えます。大学の成績を軽んじるわけではありませんが、その頃になると良い成績を修めるための要領だけに長けた学生も少なくないでしょう。ですから先に述べましたように、どれほど情熱を持って取り組んだかを評価したいと思うのです。

C田：「人生いつも今が始まり」「大切なのはチャレンジ精神」「物事を始めるのに年齢は関係ない」をモットーとし、くじけそうな自分を励ましていること。夢と希望を持って大学入学を果たし、その初心を貫いて卒業したこと。家庭・家業の切り盛りと大学での学業を両立できたことなど、人生の再起をかけて頑張った努力を認めて欲しいと思います。

D本：現役の学生と大差が無いことであるが、即戦力になれる、臨機応変に対応できる、明るい、健康、プラス思考、コミュニケーション能力が高いこと。また社会人経験があり、会社のどす黒い部分までも知っているために、多少のことではショックを受けないこと。

質問8への考察

待望の大学卒業を果たし、新たに社会人となる門出に臨んで、自分の真価を正当に評価してもらいたいとは、誰もが望むことであろう。会社側が採用したいと思う人材は「論理構成力・コミュニケーション能力がある。総合的知に基づく判断力と経験がある。行動力のある人。」とのこと⁹。4氏が自己分析する自身のチャームとも、多くの点で共通しているようである。

質問9-1. 欧米に比べて日本ではまだ社会人の大学入学・大学院入学がまだ一般化されているとはいえない状態にあります。貴方だけでなく、社会人入学の枠で大学に入り、そして卒業して社会に出て行く全ての学生が期待とともに一抹の拭い去れない不安を抱えていることもまた事実ではないかと思えます。貴方にとって不安の種になっている事柄とは何ですか。

A崎：もとより就職できるかどうか不安である。「この年齢で」就職することが自分にとって有利とは思えない（不利である）が、次のステップの為には必要であると判断している。

B森：私自身については現在、会社経営をしている立場ですので、ありません。けれども一般論では、社会人学生にとっての最大の問題は再就職だと思います。

C田：年齢による就職制限。不況による就職難。

D本：自分が学生生活を送っている4年間で、同じ年齢の社会人が得る4年間に比べて、大きな経験や精神的成長などの面において差がつくのではないかと不安である。

質問9-1への考察

社会人学生が卒業後、改めて飛び込むことになる社会という大海原。充電期間・助走期間を修了して航海本番を迎える訳だが、果たして順風満帆の出航となるのだろうか。4氏を苛んでいる不安はないか、尋ねた。

A崎は「就職できるかどうか不安」、B森は「最大の問題は再就職」、C田が「就職難・就職制限」と、いずれも就職について気にかけているようだ。特に「この年齢で(A崎)」「年齢による制限(C田)」と、年齢が彼らにとっての足枷となっていることが痛感できる。日本では定年退職など、年齢が絶対的な理由や基準となり、それ次第で物事が許可されたり断念せざるを得ない状況を作り出している。社会の構成員が年齢の前に屈服せしめられている日本式の歪んだ年功序列社会は、世界の趨勢がエイジレス・エイジフリーに向かっていることから翻って、後進的だと言わざるを得ない。卒業生(人材)を社会に手渡しする大学には、彼らの再出発を見守る責任がある。今後、大学と社会のより公正で穏当な関わり方について、熟思の余地が残されている。

質問9-2. 貴方の後に続く後輩のためにも、社会人入学の経験者として貴方ならではの視点から、学生・大学・社会に対する建設的で具体的なアドバイス・提案があれば述べてください。

A崎：(1)学費の確保を負担に思っている社会人学生が奨学金制度の申請をできるようになれば良いと思う。学費の心配は勉学への意欲を削ぐものであり、奨学金制度があれば経済的にも時間的にも苦しまずに、余裕を持って学生生活が送れると思う。(2)入学時にある先生に「社会に出たらリーダーシップを取る人になれ」と言われて奮起できた。今の自分にとって、まず先行する目標としては国家資格を取得すること。そして卒業後の目標としては、遣り甲斐のある仕事に就き自分らしく伸びやかな生活を送りたい、と考えている。他の学生のためには「目標を持つこと」、

「励みになる言葉や行動を受け入れ志気を保つこと」を私からの助言としたい。

B 森：前述しました通り、私は経営者の立場ですから、会社を退職あるいは休職して大学に通っている訳ではありません。けれど社会人入学をされる方の多くは退職あるいは休職しなければ現実的には大学へは通えません。つまり、経済的と時間的問題に終始左右されると思うのです。話が少し横道に逸れてしましますが、経営者の立場として申しますと、もし社員が大学へ行きたいという理由で1年か2年の休職を申し出たとしたならば、(残念ながら)解雇という形を取らざるを得ません。このことは私の会社が成熟していないからという評価に繋がるのかもしれませんが、現実、会社とは営利が大前提の組織であり、特に今の日本の経済および社会状況の中では「いいよ、勉強していらっしやい。大学へ行っている間の最低限の生活保障はしてあげるよ。」なんてことは言えないのです。そうすると「安定」という道を捨て、大学で学ぶことは勇気のいることだと思います。しかし、それも卒業後の自身の進むべき道をしっかりと描いているならば、4年という年月は人生において無駄な時間にはならないと思います。ですから学生の皆さんは時間調整を上手くやり、いかに無駄な時間を生きた時間に変えるかが肝要であると思います。

C 田：日本も欧米のように、もっと社会人に対して大学の門戸を広く開くべきではないでしょうか。大学とは本来、学びたい学生と教えた先生がいて、成立する場所であると思います。大学が、18-22歳の学生によって独占されるのではなく、社会人やあらゆる年齢層の方々のために入学の枠を広げ、学びの場を確保してくれることを望みます。

D 本：学生へ3点アドバイスしたい。(1) 新鮮な気持ちを忘れない (2) ミスは素直に謝る (3) 全てを満たすことができる職場や生活などないから、優先順位を付けて考えてみる。例えば職場において、1 番目：やりがい、2 番目：人間関係、3 番目：有給・休日、4 番目：給与など、譲れない順にプライオリティを付ける。必ず不満を見つけるのが人間の性分だと思うので、順位の低いことが満たされなくても眼を瞑るようにする。

質問9-2への考察

4氏からの提言は大きく、大学と一般型学生へ向けたものに分けられる。まず大学に向けては「社会人学生のための奨学金制度(A崎)」を整えることや「門戸を広く開くこと(C田)」に期待が寄せられている。「学び始めるのに遅すぎることはない」「目標を持

つことは幾つになっても遅くない」と古くから言われることが虚偽にならないためにも、大学は社会人に入試の別枠を設けて歓迎し、入学後も柔軟な制度で対応する姿勢を示したい。

一般型学生へ向けては「目標を持つ、励みになる言葉や行動を受け入れる (A崎)」「進むべき道をしっかりと描く (B森)」「時間調整を上手にする (B森)」「初心を忘れない・ミスを認める・優先順位を付ける (D本)」ことなどが勘案されている。

質問10. 貴方は大学を卒業したら何になりたいですか (どんな職種についてみたいですか、どんな仕事に転職したいですか)。そして貴方の次の (卒業後の) 目標*とは何ですか (例: 大学院に進学・起業したい)。それは何時ごろしたいですか (例: 今すぐ、5年以内、子どもが成人したら、退職したら)。そのために貴方は何か動き始めていますか (例: 大学院案内・起業情報を集めている)。特に無ければ、無しで結構です。(*目標は夢とは異なる。夢より更に現実味のある、是非とも将来実現したい対象となっている事項を指す。)

A崎: 卒業したら大きな組織の一つの駒ではなく、たとえそうであったとしても、助けを必要としている一人一人とじっくり対話ができるような仕事に就きたい。社会福祉士 (ソーシャルワーカー) になりたいと思っている。そして5年後にはケアマネジャーの資格を取り、障害者・高齢者の介護の仕事に勤しみたいと考えている。並行して、広い意味での障害者・高齢者・その家族のためにサポートビジネスを目指して起業する予定である。

B森: 卒業したら自社の仕事に専念することになると思いますが、退職後には滅私奉公の精神で小学校のスクールカウンセラーの職に就いてみたいと思っています。そのために現在、子どもの心理について学ぶなど、教職課程を履修しています。

C田: 可能であれば本学大学院 (社会福祉専攻修士課程) への進学を考えています。もしくは児童福祉職へ就きたいです。

D本: 経営コンサルタントの会社に就職したい。そこでノウハウを覚えて5-10年位で、経営コンサルタントの会社を起したい。更に外食産業などへも幅を広げ、多角的ビジネスに挑みたい。そのために今から、資格 (中小企業診断士) を取る、語学を鍛える (短期留学をしたい)、大学院に進学する (最先端の経営学を学びたい、MBAを取得したい) ために行動したいと思っている

質問10への考察

きちんと計画を立てなければ目標は達成されるはずがない。願っているだけで、設計図なしには家が立たないことと同様である¹⁰。逆に、計画という直向さや決心という強さがあれば、目標は成就される。何処へ行きたいのかが決まれば、どのようにいきたいのかも見えてくるものであり、自分の将来に、一か八かの賭けや単なる夢ではなく、実現する時を視野に収めた確固たる目標を掲げることの重要性は、今更改言するまでもないだろう。

自社を経営するB森以外は「社会福祉士・ケアマネージャー (A崎)」になることや「児童福祉職 (C田)」「経営コンサルタント (D本)」など、卒業後に就きたい職種・職位を明確に掲げている。そしてその職務経験を足がかりとして、A崎は「障害者・高齢者・その家族をサポートするビジネス」、D本は「多角的ビジネス」と起業へ向けて、チャンスの到来を狙っている。またC田とD本にとっては「社会福祉専攻修士課程」「MBA取得」と、上級学位の修得も次なる目標となっているようだ。

4. 結びにかえて

社会人が大学へ入学する動機・目的は、学歴・学位の取得、キャリアアップ・キャリアチェンジ、独立・起業のため、そして社会活動に活かす、教養を身に付ける、日常生活の刺激・人脈を作るためなどと、一般的には言われている¹¹。社会人学生は引越しでも転職でも、結婚（離婚）することでも見出せない新天地を求めて、大学へ来ることに望みを馳せてくれた。数ある選択肢の中から、大学を選んで入学してくれた。だからこそ大学は、彼らのその期待に応える自らのあり方について検討を重ねていかなければならない。

そのためにまず本稿では、大学が直面している問題を見直した上で、誰のための大学か、何を教育する大学か、いかに教育する大学か、などに関し省察する。また学生たちが卒業後に、各自の目標を叶えられることを願い、大学と社会の関わり方、大学の未来像についても希求を述べたい。

(1) 大学が直面している問題

文科省の試算によると2009年、大学・短大志願者数と入学者数は均衡する（それぞれ70万7千人）ことになり、大学全入時代の到来が不可避となる¹²。その来るべき事態の予波なのだろうか、不吉な未来を占うかのようなデータが大学へ揺さぶりをかけてきている。

日本私学振興・共済事業団の調べでは大学506校、短大434校のうち、02年度春の新入生が定員を割り込んだ大学・短大は143校（28.3%）¹³。また私立の4年制大学を運営する学校法人のうち、支出が収入を超えて赤字だったところが109法人に増え、全体のほぼ4分の1を占めたことが伝えられている¹⁴。

このような状況の中、大学あつての予備校でありながら、大学を凌駕する勢いを示す彼らによる格づけ（入試の難易度）が、大学の命運を定めるまでになっている。しかも大学は「高校化・幼稚園化している」と喧伝されたり、「サービス業でありながら殿様商売である」などと批判の標的にもされている。大学は一方的に論われるままになるのではなく、入学時に問われる学生の受験学力以外の資質を以って、自らの方針・試み（教育内容・教育環境など）を標榜していくことが必要であろう。

今後、若者人口の増加が見込めないことから、大学の定員割れが恒常的になり、やがて大学は窮状に陥ることになる。つまり現実問題として大学には、延命措置とは異なる抜本的ポリシー・パラダイムの変換が求められている。こうしているうちにも学生が納める授業料の多寡によって、「勝ち組・負け組」と大学の2極化が進んでおり、大学が従来通りの存在として機能できないことが衆目の一致するところともなっているからである。以下に、社会人学生から承った意見を鑑みながら、大学が直面している問題への策を講じ、解決への途を探りたい。

（2）誰のための大学か

社会人学生が増えてきてはいるものの、日本の大学にとっては、いまだに18歳人口が一元的な大学生モデルであり、大学が彼らによって占有されている文化が健在している。上に述べた問題に対峙するためにも、大学は今まで以上に多様な学生を募っていく必要がある。そしてそのためには、多様な入試・入学制度が設けられなければならない。

一例を挙げるならば、2002年度には私大の254校、国公立の16校で実施されたAO入試¹⁶はもとより、一芸入試・論文入試¹⁷・プレゼ入試¹⁸などがある。また18歳になるのを待たずに入学を許可する飛び入学¹⁹や暫定入学制度²⁰。更には60歳以上の高齢者を対象とするフェニックス入学制度²¹などを取り入れることができる。肝心なことは大学が、ピカピカの1年生を受け入れる拘りを絶ち、卒業生をピカピカにして送り出す任務を負っていることへの自覚を新たにすることである²²。

入学後にはパートタイム制（長期在学制度）があれば、学習に自信がない人でも長い年月をかけてマイペースで学べることから、安心して参加できる。ストップアウト（一

時的に就学を停止すること)を認め、免れない事情で休学した後にも、復学できるならば、更に安心である。またリピーター学生が主専攻・副専攻の他にも、第二・第三の学位を取得できる複数学位制度を整える。その一方で、大学が空洞化しない(授業が活性化される)ために放校制²³を導入することも一案である。

忘れてはならないのが、学生ローンである。学費の納入が頭痛の種になっている学生もいるであろうから、無・低利子で学費を融資する。或いは奨学金を給付して学費を減免する試みも欠かせない。また学費の負担を各学生が調整できるように、単位制(1単位あたりの費用を設定し、取得する単位数に応じて学費を払う)にする。加えて正規に入学しなくとも、科目履修生・聴講生として参加できるのであれば、大学は興味を持って下さる方々との距離を一気に縮めることができる。

どの大学を卒業したかより、何を学んだかを問うのが今時の価値観のようである。このことに答えて、総合大学の範疇を超えた多元的複合大学(マルチバーシティ)として生まれ変わろうとしている大学がある。中でも多キャンパス(サテライトキャンパス・シティキャンパス・ステーションキャンパスなど)化に留まらず、大学間単位互換ネットワークが充実されているので、国内留学が自在にできる大学が人気を博す傾向が示されている²⁴。

さて日本の大学にとっては、英語がリングフランカであるのに対して、日本語が一国的(局在的)言語であるという限界を克服することが課題のひとつと言えるであろう。帰国子女や海外からの留学生を少しでも受け入れ易くするために、 Semester制で対応することが望ましい。日本人が日本語で日本人に教える「知の鎖国」時代は疾うに終焉している²⁵。これからはユーマップによる単位互換スキーム(UCTS, UMAP Credit Transfer Scheme)²⁶を整備できているか否かが大学の明暗を分けることになるかも知れない。

欧米の大学には市民に広く参加を募っているところがあり、日本の大学も見習うことができそうである。ドイツの大学に範を取ってみると、フォルクスホッホシューレ(Volkshochschule)では、教養・職業の分野で幅広いクラスが市民のために開講されている。この種の大学は日本には例がないが、民間教育文化産業(カルチャースクールなど)に公民館などの社会教育施設が加わった市民大学と表現できるだろう。年に2回の(全国共通)試験があり、統一修了資格を提供することから、社会的にも評価を確立している存在である²⁷。

またアメリカには競争を経ずに入学できる大学として、コミュニティ・カレッジがある。当大学を修了すれば準学士の資格が授与される。従ってもし、学生が通常の大学へ

転学を希望する場合には、大学の1、2年の課程を修了したと見なされて単位が換算されることになる²⁸。

フォルクスホップシューレやコミュニティ・カレッジは換言するならば、大学という教育段階への最初の取っ掛かりとなる大学であり、中・高校退学などの理由で従来は入学の機会を与えられていなかった層にも、その機会を与えられる大学である。日本の大学でも同様に、社会人はもちろんのこと、海外からの留学生や高齢者など、大学が異文化・異世代交流の機会を演出する主催者として、幅広く門扉を開く姿勢が求められている。

(3) 何を教育する大学か

大学にとって実学や資格の取得は最上課題ではないが、それらに対する学生の関心に呼応できなければ、淘汰の時代を生き抜くことはできない。実際、大学内のダブルスクール・学内講座など、学内で資格支援講座・公務員試験対策講座を執り行う大学が増えている。なぜなら、そのことにより大学は他の教育機関に学生を横取りされずに済み、かつ就職実績が上がる効果を見込むことができる²⁹。即ち、一兎を追ううちに二兎を得ることになるからである。

また大学の生涯学習センターで、大学の学部には無いような多種多様な教養・娯楽・スポーツの講座を開講している大学もある。受講生には図書館やコンピュータラボ・カフェテリア・スクールバスの利用を許可するなど、受講以外の特典を付加することで参加者を集めている³⁰。

ここで問われるのは、大学とカルチャーセンターやパソコン塾、語学学校の違いであろう。大学とは埋もれている（蔵された）学生の可能性を見つけ出し、それを引き出すことができる、そしてその過程で学生が依拠できるファシリテーターとなれることに拘りを持つべきである。

自分の能力に気づかずにそれを無視したり抑圧している人が多い。大学は、在学生在が自分の将来に至高なグランドデザインを描けるような、そして卒業生が将来苦難に瀕する時に寄って立つ瀬となれるような、自信や信念の育成に全力を注ぐ³¹。そうできることこそが大学の無類な存立条件である、と信じたい。

しかし大学の現状は理想論とは懸け離れている。そこには「どうせ面白くないから聞かない（勉強しない大学生）」と、「どうせ聞いていないのだから面白くなくて良い（教育しない教員）」が溢れている。面白いはずの学びが、何時の頃から退屈なものになってしまったのだろう。そしてどうすれば授業を「面白そうだから聞きたい大学生」や「聞

いていてくれるから面白くしたい教員」へ方向転換できるのだろうか。

人は期待値で行動する、と言われている。人は、全く報酬が期待できないことに対して、なかなかやる気を起せないことが認められている³²。しかしその対極として人は、何か得るものがあると期待できればアパシーから脱して動き出す習性がある。そして更に、動き出すことで成果を実感できればできるほど、興味や関心を深く強く抱くようになる生き物なのである。

しかし、そうであるからと言って、大学は学生をやる気にさせてみせると躍起になったり、学生がその気になるのを気長に待つことはできない。教員が、(学生ではなく)授業を変えることができるだけである。

へえーと感心したり、まさかと驚いたり、はっはと笑ったり、そんなばかなと疑問に思う時に、学びが発生する。ならば教員がショーマンシップを発揮して、毎回の授業を感動と驚きと笑いに満ちたクラスにできれば良いのだが、それは神業である。マジックやトリックに長けていない生身の教員はせいぜい、授業を工夫することしかできない。では実際、どうすることができるのか。

学生が起床きて、準備して、通学して、そして毎コマ数千円まで払って、参加する価値のある授業とは、彼らを主役に据える授業であろう。教員の知識・技術を伝授・伝承する形式 (seed oriented) ではなく、問題意識との邂逅を作り出す問題解決形式 (issue oriented) の授業でなければ、学生の能力は涵養されにくい。静かに教授の話を書く講座や、お互いのプレゼを誉め合うだけの授業に慣れてしまえば、友達とファッションや異性の話しかできない大学生になってしまうのも無理からぬことである。話し合いが繰り広げられ、賛否両論が戦われる授業であって初めて、海外に照らしても大学レベルと呼べる水準になる³³。日本の大学は、知識の理解・記憶を越えて、学生が発想し応用できるための表現力・統合力・分析力・行動力・評価力を培う場、学生が切磋琢磨した成果が発露される場とならなければ、世界をリードする社会人を輩出することはできない。

改めて、学生が大学で身に付けるのは、知識ではなく視点である。彼らが考え方のフレームを構築し続けられるような授業への取り組みに、期待が寄せられている。

(4) いかに教育する大学か

一年のうちで大学の設備や教室が使われているのは百日程度である。このことは、大学には春(冬)・夏の長期的な休暇がある、また学期中にも週末や休日など授業が行われない日があるからである。年中無休のコンビニ等に比べても、大学の年間施設使用率

が30%以下であるのは能率が低すぎる。「どうにか有効利用ができないものか」という疑問に対処しようと、大学が動き始めている。

大学がフル活動するためにはまず、昼間の講座に加えて夜間（6時から9時まで）にも講ずる昼夜開講制を布く。会社や学校・施設などへ赴く出前授業を行ったり、週末には泊り込みで行う週末集中講座³⁴を手がけることができる。通常これらの講座・授業は、併任教員により賄われるので教員の稼働率も上昇することになる。

またコンピュータラボを24時間、図書館を午前0時まで開放する。それに伴ってキャンパスバスで交通を確保し、安全を期すために警備員を配置するなど、学生が見守られた環境の中で時間の制限に煩わされずに過ごせる大学もできている。アメリカの大学ではこれらのサービスに加えて、キャンパスの中に海外からの留学生も住める単身用・家族用の宿舎や病院・銀行、子どもが通える保育園まで完備しているところがある³⁵。学生がキャンパスの中で生活を送れるようなサービスに心を配る経営手腕が、日本の大学にも求められている。

近年、大学にとっては「レジャーランド」の呼称が板についたようである。それならばいっそのこと、その名称を逆利用する術はないのだろうか³⁶。その為に例えば、1年1度の学園祭のような展覧会・発表会・コンテストなど、学生による熱意溢れる活動を常にキャンパスのどこかで催すなど、レジャーランドの名に恥じない楽しい学びを盛りだくさんに企画することができる。大学が学生にとって楽しみながら自分を磨ける溜まり場となるならば、高校生や近所の住民など、誰もが自然に集まってくるはずである。「楽しそう」が最初のきっかけで良い。そこから学術も技術も派生する。楽しいからと言って学習内容のランクが落ちるわけではない。もともと学校の語源であるSkholéとはギリシヤ語で「余暇」を意味しているように、昔から学びとは余暇を興じるものであったのだ。

人の個性が重視されている時代に、大学のあるべき姿も一様であって良いはずがない。大学が目指すのは最早、ミニ東大・京大やサブ慶応・早稲田などではない³⁷。物真似よりは個性と創造力溢れる、知の楽園・知の迷宮で大いに結構である。学生に存分に楽しんでもらい、迷い込んでもらうことが大学の本命である。

(5) 大学と社会の関わり方

人事採用の時に、人柄や将来に開花するであろう可能性を、大学名や取得資格（パソコン能力、語学力を含む）より重視する企業が増えていると言われている。しかし企業側が人柄や可能性をどのような基準でどのように判断しているのか、不確かな部分が残

されている。

東京ガス都市生活研究所が日本人材紹介事業協会加盟128社の面接担当者に聞き取り調査をした結果、「面接では何時第一印象が決まるか」というと、「入室から第一声まで」が、47.7%、「自己紹介から最初の質問への対応まで」が28.1%であった。「顔が第一印象に与える影響」は若者が39.1%であるのに対し、中高年の場合では57.5%にまで上がる。中身で勝負をかけようとする学生へ、企業が第一印象や顔で採用を決めている現実が暴かれている³⁸。

雇用の流動化や能力主義への移行に伴ない、社会人として職業人として社会の変化に遅れをとらないためにフロントエンド式の教育を改め、人生のどの課程でも何回でも学び直しができるリカレント教育が推進されている。更には人生を卒業するまで学び続ける生涯学習型社会への移行が、世界的潮流ともなっている。

このように以前にはできなかった学習のやり直しができるようになった、与えられていなかった学習機会が与えられるようになったことは、教育界にとって画期的な進歩である。但し、大学がやり直しは認めておきながら、社会がやり直した成果を評価できないのであれば、やり直した学生の機会は奪われたままである。

社会人入試の別枠が最初から「社会人の出直し」に名を借りた、大学の利益をあげるための制度なら、話は別だが、真に彼らの出直しを見守ろうとする制度改正であるならば、彼らを受け入れる社会に変換を迫ることもまた大学の任務と責任であろう。大学と社会が整合性を欠くその狭間で、社会人学生が臍を嘔むことにならないように、彼らの努力と功績を見定める審美眼を、大学は社会に求め続けなければならない。

社会人学生にとってもう一つ、彼らの再出発を阻止する社会が抱えるイズムがある。それとはユースイズム（若さを重視する主義、youthism）、またはエイジズム（年齢主義、ageism）であり³⁹、肉体を誇る主義（bodyism）、顔の美醜に拘る主義（faceism）、大きさを誇示する主義（sizeism）と肩を並べる偏見である。手塩にかけて育てた学生が社会のイズムに捕らえられて、能力以下の仕事に従事させられたり（underemployment）、不当に仕事を与えられない（unemployment）ことがあるとするならば、大学として穏やかではいられない。大学は社会に、政治・経済的な妥当性に基づく卒業生の権利を主張して止まない姿勢を貫くべきである。

スムーズ（単調）であることは、躓いて転んだり、挫折して引き返すことより良いことだと、一体いつから私達は考えるようになったのだろうか。若い時に失態を演じた人、惨敗に見舞われた人こそが、偉大な人物になれることもある。これからはやり直し・出

直しができない一方通行な社会の遺制を引きずることなく、「失敗」と書いて「経験」と読み替えることができる社会へ成長を遂げられることを願う⁴⁰。

(6) 大学の未来像

大学はエリート、マス教育を経て、エガリタリアン教育へ到達しようとしているが、その次の段階は誰の為の教育になるのだろうか。2種の予測が立てられる。

第一に考えられるのは収容定員の確保に行き詰まった大学が、その収容年月を延長させる（量の不足を長さで補う）ようになることである。そうともなれば大学院が矢継ぎ早に創設されて、大学院全入のシナリオすらできあがる。博士の学位より更に高い、例えば名誉博士学位（Honorary Doctor, Doctor Honoris Causa）など、今では幻と呼ばれている学位を誰もが授与されることになるかも知れない。

第二には、エリート・マス・エガリタリアンと一巡した結果、復古的にテイク・トップのための超級エリート教育へ戻る可能性を見込むことができる。実例として既に、「スペリオール東大」と名付けられた少数精鋭のエリートコースが東大で編成されている⁴¹。

また近い将来、物理的な場所としての大学は不要になるとの説が浮上している。いわゆるバーチャル・ユー（virtual-U.）が覇権を握ることになるという大胆な仮説である。しかしあくまでも現実あつての仮想の世界であるから、現実の大学が仮想大学に呑み込まれて絶滅することはないのではなかろうか。乗っ取られるのではなく、両者は互いに補完しながらパワーアップする極めて友好的なライバルとなって共存していくことになるだろう。

「教育界の黒船来たり」の号外も流れて来ている。丸ビルに、ハーバード・ビジネススクール日本リサーチセンターやストックホルム商科大学欧州日本研究所（スウェーデン）が開設されるなど、海外の大学が日本進出に乗り出しているのである。世界の銘柄大学が日本で開学することになれば、日本の大学は衝撃を免れない⁴²。それどころか今後日本の大学は、国際競争の怒涛の坩堝に呑み込まれることになるだろう。

本稿では上述のように、大学の目前に立ち込める暗雲の事態に備えて、大学とは学生のために、どのようにあるべきか、分析・検討してきた。大学は、教育と研究の2つの営為に安住できた時を過ぎて、サービス度が冷厳に問われる当今となっている⁴³。

サービスとは学生へのものであるが、その精神の根ざすところは複雑である必要はないと思われる。例えば大学は、学生にとっての橋やトンネルであれば良いのである。橋やトンネルは、川や山など一人では超えられないと思える僻地や、あまりに遥かまで到達

困難だと思われる遠隔地へ導くことができる限り、多くの人々が通り過ぎてくれる。人々が目指す前途へ通ずる足場であるならば、混迷の時代にこそ大学は、人々にとって無くてはならない一筋の希望となれる。

表3：大学とは…みたいなもの

大学とは…みたいなもの	なぜなら…だからです
A崎：運転免許	使わなければ身分証明書になる。運転（仕事）をしないと必要無いもの。始動時に必要となる（その後は本人の運転手腕による。）
A崎：おみくじ	凶と出るか吉と出るかは時の運。（本人次第で凶を吉に転じることが可能だとは思いますが。）
B森：タイムマシーン	過去の忘れ物を取りに行くようなもの。
B森：休憩時間	会社の時間の合間を縫って通学している。
C田：定期預金	4年間かけてこつこつと知識や経験を貯蓄すると自身の人生の幅や可能性が広がる。
C田：夢気球	4年後の自分がどんな風になっているか、あれこれ考えられる、夢や期待を乗せている。
C田：長距離マラソンのスタート地点	JIUに入学したことで「よーいどん！」と、元気に第2の人生を再出発した感じ。
D本：ユニ・蟹	濃厚な中身が詰まっている。
D本：複雑な叉路	どの方向へも向かって行ける分岐点・交差点。
D本：家の骨組み	小・中学で穴を掘り、高校で土台を造り、大学で骨組みを立てる。
D本：海のだ真中	一番広い視野で見ることができる。（勉強だけでなく、見て感じて交流できる。）
D本：無人島	生き延びたい奴は頑張るし、そうでない奴は死ぬ。

(注)「貴方にとって大学を一言で表現するとどんな言葉になりますか。何かに喩えることができますか。幾つか考えてみてください。そしてその理由も述べてください。」と依頼し、筆者から次の3例を提示してある。1. 大学とは「ガソリン・スタンド」のようなもの、なぜなら「給油して再始動する中継地点」だから。2. 大学とは「へそくり」みたいなもの、なぜなら「隠し貯めしておき、いざという時に役立つ」から。3. 大学とは「ビタミン剤・デザート」みたいなもの、なぜなら「主食ではないが、あれば安心・幸せになれる」から。

5. 付記

この場を借りて、筆者からお礼を述べさせて頂きたい。まず社会人学生の4氏が本研究に協力して下さったことは、筆者にとって幸甚であった。大学院入学ではなく大学入学を

決意した4氏であるからこそ、彼らの言葉には噛み締める重みがあったと、今振り返っている。高校中退・高卒者として直面した社会の中で、大学進学への決意を固めるに至った過程は、決して安穏とした道のりではなかったはずだ。そのような彼らの足取りの一步一步が、一言一言に置き換えられていた書簡の封を切る度に、彼らの強さと直向さを感じることができた。4氏から真摯なご意見を伺えたことに、改めて深謝する次第である。

また最後となったが、このような学生との貴重な交流の機会を、学長所管研究として支えて下さった、水田宗子学長先生に心よりお礼申し上げたい。

[註]

- 1 紀元前385年前後に創立。学園の究極的目的は哲学の研究にあったが、他にも数学・天文学などが教授研究されていた。世界大百科事典（1、ア－アレニ）。平凡社。1988年。105頁。
- 2 Trow Martin. Reflections on the Transition from Mass to Universal Higher Education, Daedalus, vol.99. no.1, 1970, pp1-42.
- 3 古沢由紀子「大学サバイバル」集英社新書 2001年 15頁
- 4 田坂広志・中谷巖「若きサムライたちへ」PHP研究所 2001年 201頁
- 5 本稿は、2003年度水田学長所管の研究である。
- 6 学らんを臍の辺りまで短くしたもの。
- 7 わたりが広く、足首には隠しチャックが付いているニッカーボッカー風のズボン。
- 8 大学検定資格試験のこと。教科ごとに平均点以上を獲得し合格すれば、高校中退でも大学を受ける能力（資格）があると認められる。
- 9 鈴木雄雅 「大学生の常識」新潮選書 2001年 171頁
- 10 歌川豊国「96歳の大学生」PHP研究所 2000年 91頁
- 11 山田礼子「社会人大学院で何を学ぶか」岩波新書 2002年 27頁
- 12 前掲書3 12頁
- 13 佐賀新聞（朝刊）2003年 1月19日
- 14 朝日新聞（東京・朝刊）2003年 1月3日
- 15 山口昌男「独断的大学論」ジーオー企画出版 2000年 23頁
- 16 書類選考（高校の成績・スポーツ活動・ボランティア活動など）や面接、グループ討議を重ね、リーダーとしての資質や課題に取り組む姿勢など、入学希望者を多面的・総合的に評価する選抜方法のこと。前掲書11 131頁
- 17 主に大学志望動機を記す論文を書くことが課題となる。職場の経験など入学前の知識・技術を単位として認定することもできるので、社会人にとって有利な入試である。
- 18 調査書（内申書）と自己推薦書による選考を通過した受験生が、前もって与えられたテーマについて調査・発表し、その後面接官による質疑に回答する方式。親や先生が調査の過程で手伝っても良い。毎日新聞（東京・朝刊）2002年 3月4日
- 19 高2から大学の進学を認めるバイパス制度で、1998年に千葉大学で行われたのが始まり。天才学生の発掘に一役買っているが、飛び入学した学生は年少の時点では専攻が決められないこともあるから、3年になって（専門課程を受講する時に）そうできることが望ましい。
- 20 入試試験で成績が下位だった者が暫定的に入学を許可されて、大学で学ぶことができる。一年後に再び試験を行うか、一年間の学習への取り組みを大学が再評価することで、改めて入学を許可する。大学側は彼らのために、高校レベルの補習授業を準備しておくことになる。

- 「大学革命」別冊「環」2 藤原書店 2001年3月31日 166頁
- 21 広島大学で2001年に大学・大学院入試を対象として始められた。前掲書3 171頁
- 22 前掲書3 90頁
- 23 GPA (Grade Point Average) により成績を0-4 (1-5) に換算する。成績が1.0 (2.0) に満たない学生を放校する制度。
- 24 喜多村和之「大学は生まれ変わるか」中公新書 2002年 120頁 佐賀新聞 (朝刊) 2003年 1月19日
- 25 前掲書20 25、180頁
- 26 ユーマップ (UMAP) とはUniversity Mobility in Asia and Pacificのこと。90年代後半になって、エラスムスによる国際交流計画を推進するための単位互換スキーム (ECTS, ERASMUS Credit Transfer Scheme) に模して作られた。エラスムス (ERASMUS) とは European Community Action Scheme for the Mobility of University Studentsのこと。ジョン・マイヤー「グローバリゼーションとカリキュラム：教育社会学理論における問題」教育社会学研究 (第66集) 2000年 79-95頁
- 27 三輪健二「ドイツの生涯学習」東海大学出版会 2002年 81頁
- 28 宮田敏近訳「誰でも何でも学べる大学」玉川大学出版部 1999年 (Any Person, Any Study. Eric Ashby. The Carnegie Foundation, 1971.)
- 29 中日新聞 (朝刊) 2002年 9月10日
- 30 朝日新聞 (大阪・朝刊) 2002年 9月6日
- 31 高橋和巳「人は変わる」三五館 2001年
- 32 秋庭道博「生きた言葉」実業之日本社 2001年 143頁
- 33 前掲書3 193頁
- 34 宿泊型週末セミナー。グループワーク・ワークショップなど、親近感を感じられる参加者同士ならではの濃厚な話あいができる。旅行も兼ねられるので気分転換の効果もある。
- 35 遠藤克弥「最新のアメリカの生涯学習」川島書店 1999年
- 36 前掲書15 50頁
- 37 前掲書20 26、76頁
- 38 毎日新聞 (東京・朝刊) 2002年 3月1日
- 39 ロバート・バトラー (Robert N. Butler) は年齢により差別されることは、肌の色ゆえの人種差別 (レイシズム・レイシャルハラスメント)、ジェンダーゆえの性差別 (セクシズム・セクシャルハラスメント) と全く変わらないと年齢主義 (エイジズム、エイジング・ハラスメント) を指摘した。鈴木真理子監訳「高齢者虐待 (Elder Abuse in Perspective) Simon Biggs, Chris Phillipson, and Paul Kingston」筒井書房 2001年 116頁
- 40 乙武洋匡「五体不満足 (完全版)」講談社文庫 2001年 202頁
- 41 2年生ぐらいで選り出した学生に、少人数で徹底した教育を行い、研究者・官僚候補を育てている。前掲書3 210頁
- 42 東京新聞 (朝刊) 2003年 1月27日
- 43 前掲書24 160頁